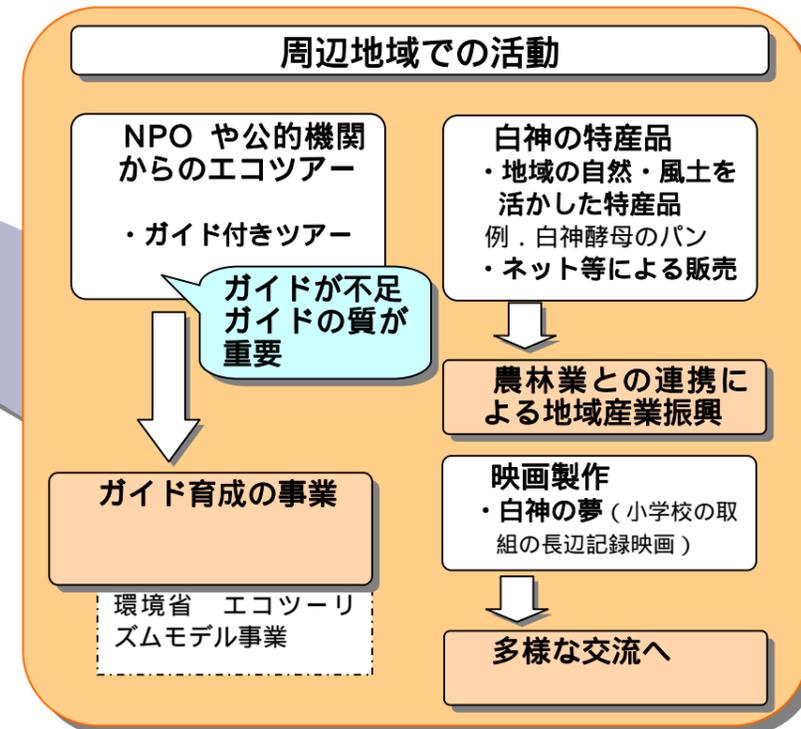
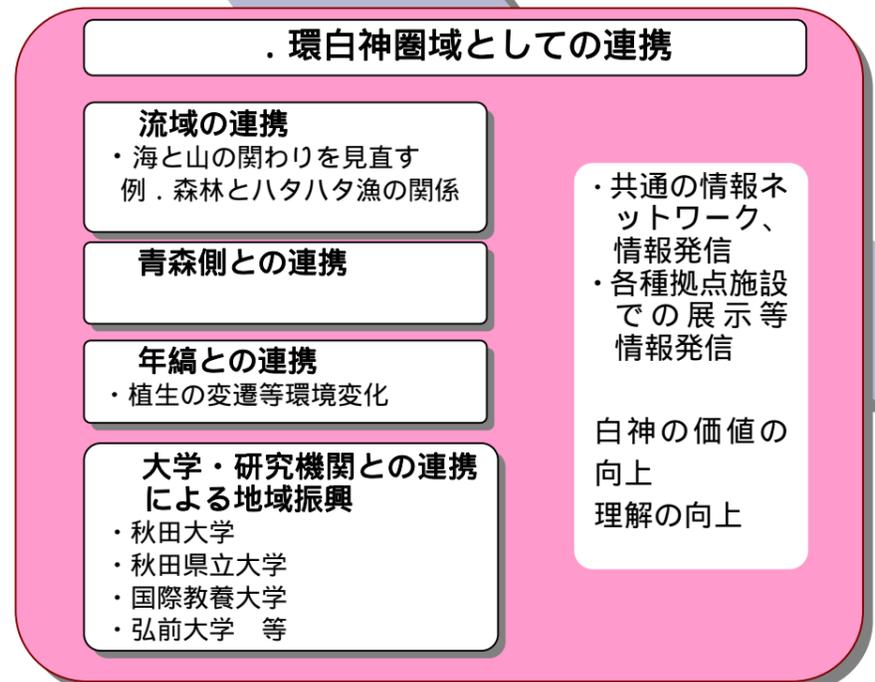


白神産地



世界遺産の自然の保全と利用の両立と
森と海の連携



旧小学校の校舎を使った
白神ぶなっこ教室



【白神森と海の連携モデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・このモデルは、集落外の主体の取組をきっかけとして、いかに集落住民主体の取組に発展させるかの取組事例として参考となるものである。各段階の取組ごと、成果を積み上げ、交流を重ね、次の段階に進むという段階的な発展の中で、集落住民が自信をつけ、やがては主導的な役割を担うことを期待するものである。

ポイント

- ・このモデルは、アクセス条件が悪いなど一般には利用しにくく、同時に自然環境の保全に万全の配慮を要する自然地域において、エコツーリズムを導入することの意義や効果を示すものである。
- ・また、白神山地の森が海の恵みにいかに貢献しているかということに着目し、単にブナの森をそれ単体としてとらえるのではなく、多様な資源、主体とも連携しつつ、自然の空間的、時間的つながりまでの理解を深めるような学びを提供することがこれからの環境を考えていく上で重要であることを示すものである。

地域における気づき

- ・白神山地は、世界遺産に登録されその知名度が急速に高まり、白神山地に行ってみたいという人が増えた。しかし、一般の人には何が価値が高いのか、どこに行けばいいのかが分かりにくい。また、空港や列車の駅から遠くアクセス条件が悪い。また、来訪者が個々に車でアクセスするのでは環境への負荷が大きくなる。
- ・そのような状況の中、白神山地に人を連れて行きたいという地元事業者としてのビジネスの着眼点があった。

白神への交通手段の提供

- ・大館能代空港から白神山地まで、予約制でバスを運行することで、環境への負荷を提言しつつ、利用者のニーズを充たす。
- ・当初利用があるのかとの疑問も呈されたが、結果的に利用があり、他の事業者にも波及する。
- ・また、利用者を分析することで、60代男性のひとり旅が意外に多いこと、通常のツアーではひとりでの参加が困難であることなど、顧客のニーズをきちんと把握することが新たなビジネスチャンスへとつながる。
- ・さらに、十和田のホテルから白神山地までのツアーは、利用者の滞在時間の延長をもたらし、十和田のホテルとも相互にメリットのあるツアーを展開することが可能となる。

周辺地域での活動

- ・一方、周辺地域においては、NPOや公的機関からのガイド付きツアーの実施、白神の特産品開発とネット等による販売、地域の学校での学習の取組とそれを記録した映画作成・上映による多様な交流の発生など、様々な主体が様々な取組を行っている。
- ・NPO等との連携による現行のバスツアーのより一層の充実を図る。

エコツーリズムで環境学習

- ・白神山地の核心部は立ち入りが制限されているとともに、地形条件等からも一般の人の立ち入りや活動は困難が大きい。核心部の自然を厳正に保全しつつ、周辺地域の多様な主体との連携、多様な資源の活用により、より幅広い学びのエコツーリズムを展開する。

- ・このことにより、エコツーリズムの事業としての付加価値を高めるとともに、利用者にとっても幅広い環境学習の機会を提供する。
- ・具体的には、NPO等との連携により自然解説を充実する。内容的にも自然観察だけでなく、山菜の見分け方や山菜料理といった地域にあるワイズユースの知恵や伝統を組み込むことが考えられる。
- ・今回の調査で明らかとなった白神山地の森林の歴史や秋田藩・弘前藩の林政史もまた、森林と人のかかわり方を学び将来に活かしていく貴重な知恵である。
- ・海岸地域のブルーツーリズムとの連携を図る。
- ・また、年縞調査の成果とあわせて、森林の変遷など環境史の学びとして充実する。
- ・さらに、周辺に点在する廃校舎や廃屋などを活用して宿泊等のサービスを展開するなど、遊休資源の有効活用により、新規の整備による負荷の低減、遊休施設やその周辺の荒廃防止や活性化を図る。

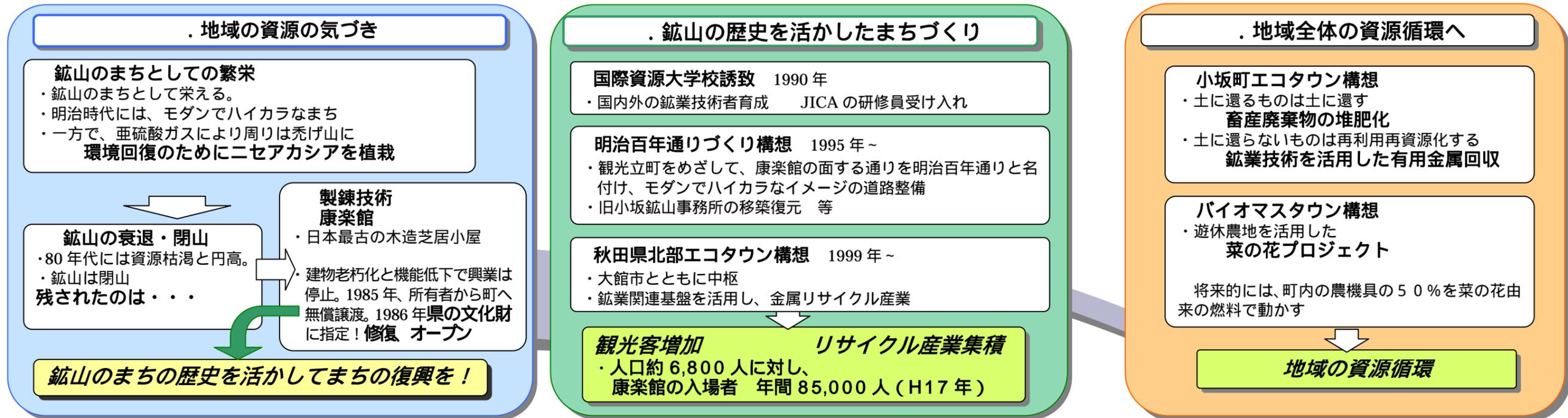
環白神圏域としての連携

- ・青森県側を含めた環白神山地の連携、大学等の研究機関との連携等により、学びのツーリズムの内容をより一層充実し、かつ利用者にとっての魅力の向上を図る。
- ・また、森とハタハタ漁の関係など、森と海の間を学ぶ機会や場を充実し、環境のつながりを学ぶ場とするとともに、これを通じて、地域としても海の地域と山の地域の交流、連携を深め、流域全体の環境の質の向上を図る。

参考 白神山地のエコツアー実施団体

団体名	所在地	活動概要
白神山地きみまち舎	藤里町	・ツアー手配 ・現地ガイド/コーディネーター ・体験農家民宿の運営
NPO法人白神ネイチャー協会	八森町	・白神山地など八森の自然についての調査研究 ・現地ガイド ・体験学習、体験教室などへの講師派遣
ネイチャーガイド白神PRO	能代市	・現地ガイド ・環境学習に関する企画・ガイド ・環境教育
藤里森林センター	藤里町	・自然保全管理 ・環境教育 ・現地ガイド ・ボランティア団体等が行う森林整備活動等への支援
株式会社白神ぶなっこ教室	藤里町	・環境教育 ・現地ガイド
財団法人藤里観光物産協会	藤里町	・ツアー企画、手配 ・現地ガイド
ジャパンツアーシステムみちのく	青森県青森市	・ツアー企画、手配
NPO法人岩木自然学校	青森県弘前市	・現地ガイド ・環境教育 ・自然環境調査、保全事業 ・環境教育指導者養成
白神マタギ舎	青森県西目屋村	・ツアー企画 ・現地ガイド
NPO法人白神自然学校一ツ森校	青森県鯉ヶ沢町	・環境保全 ・ツアー企画 ・現地ガイド ・環境教育 ・環境教育リーダー養成

参考資料) 各団体等ホームページ(インターネット検索による)

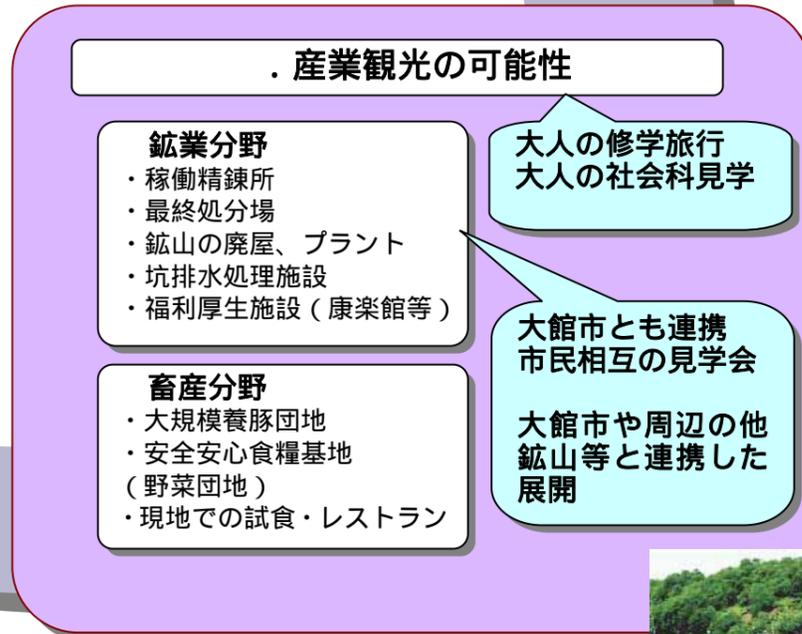
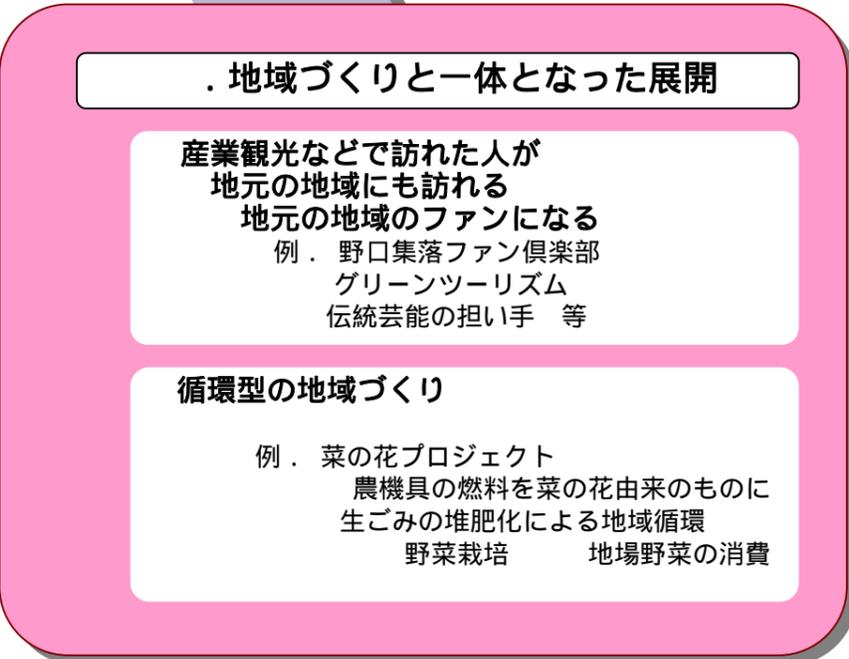


産業観光の振興と循環型の地域づくり

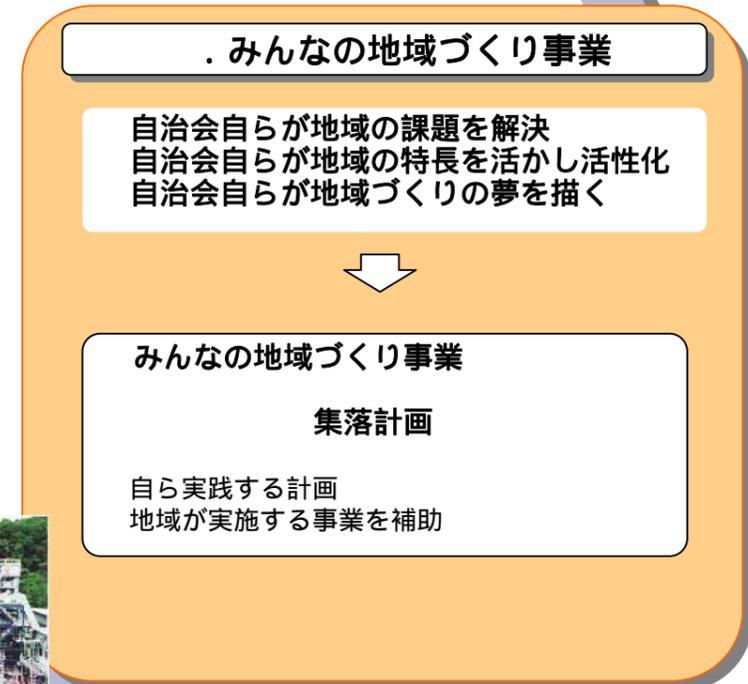


康楽館と明治100年通り

菜の花プロジェクト



金属回収炉



【小坂産業観光モデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・「小坂産業観光モデル」は、鉾山の町小坂に培われた鉾山技術と、鉾山関連の歴史的遺産やハイカラな文化に着目し、新たな時代の循環型産業を観光資源として活用し、循環型社会のあり方を学ぶ産業観光を展開するとともに、これら特定の施設だけでなく地域全体としての循環型社会の形成や地域からのまちづくりを進めていこうとするものである。

ポイント

- ・このモデルは、鉾山が低迷した後、鉾山の遺産を活かした観光まちづくりを行った点、鉾山の歴史でつちかわれた技術を活かしたリサイクル産業育成からそれを地域全体の資源循環につなげようとしている点、さらに町主導の観光振興から地域主体の地域づくりの取組へと進めていこうとする点がポイントである。

地域における気づき

- ・鉾山が衰退する中で、鉾山の歴史の中で培われた技術と、鉾山関連の歴史的遺産や文化に着目する。

鉾山の歴史を活かしたまちづくり

- ・鉾山技術を活かして、技術者育成の大学校の誘致と海外研修生の受け入れにより活性化を図る。
- ・鉾山技術を活かして、秋田県北部エコタウン計画を展開される。とりわけ、鉾山関連基盤、技術を活かした金属リサイクル産業が稼働している。（秋田県北部エコタウン計画は、p70 参照）
- ・また、鉾山の福利厚生施設であった芝居小屋（康楽館） 鉾山事務所等を移築集積し、周辺を明治100年通りとしてハイカラな文化を感じさせる一帯として整備、活用する。

産業観光の可能性

- ・エコタウン関連施設を活用し、大人が学ぶ「大人の修学旅行、大人の社会科見学」として産業観光を展開する。

地域全体の資源循環へ

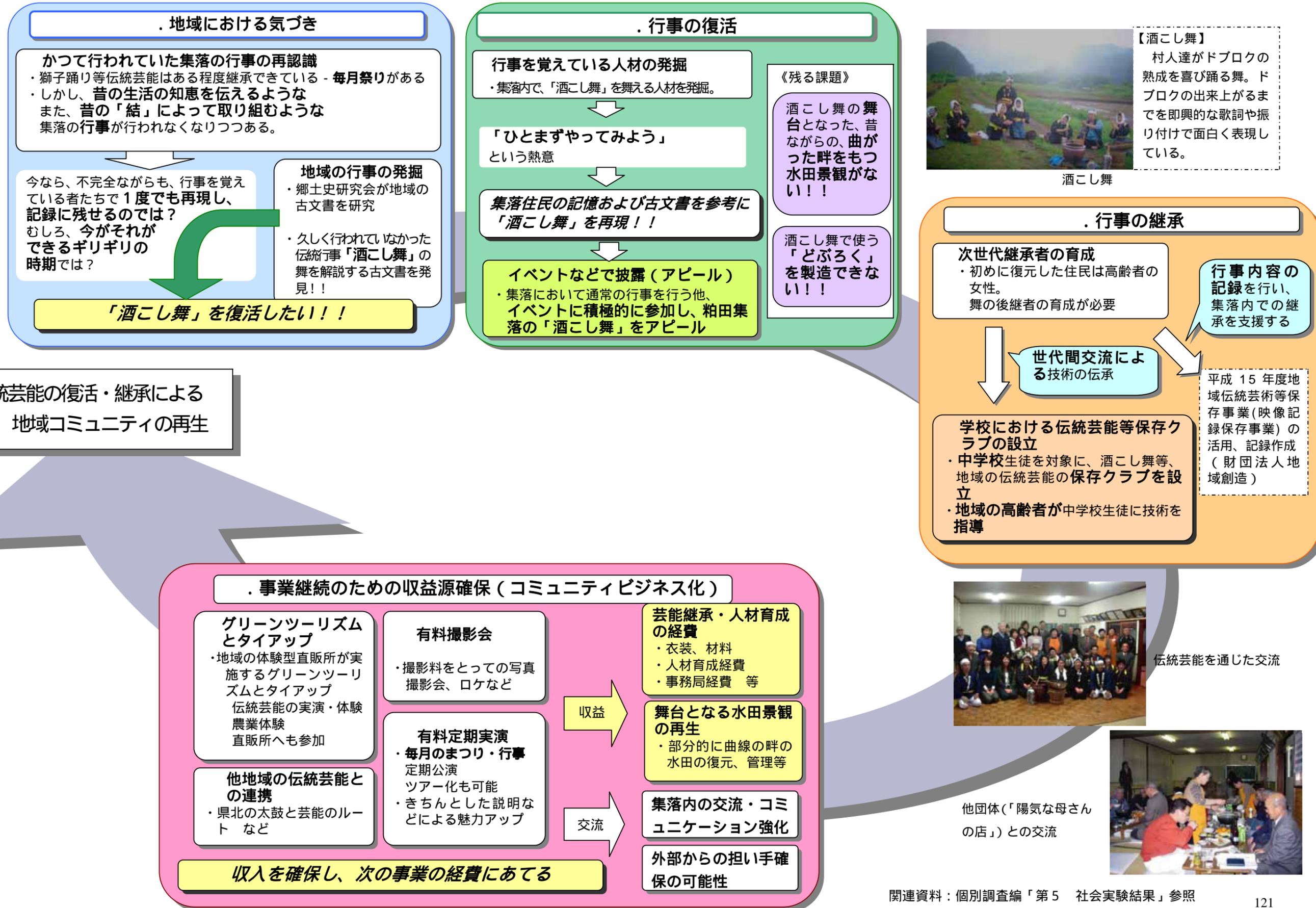
- ・エコタウンを、単にリサイクル施設集積ということにとどまらず、畜産廃棄物の堆肥化や、菜の花からとった食用油の廃油を回収し農機具等の燃料とする「菜の花プロジェクト」により地域全体の資源循環をめざす。（「菜の花プロジェクト」は、p71 参照）

みんなの地域づくり事業

- ・集落計画の作成を通じて、従来の町主導のまちづくりではなく、地域それぞれが自主的、自発的にまちづくりを行う機運、風土を醸成する。

地域づくりと一体となった展開

- ・産業観光等、観光のまちづくりと地域主導のまちづくりを一体的に展開し、外部からの来訪者を人的に、また財源的に活かした地域活性化、地域づくりを行う。



【粕田伝統芸能復活モデルの概要と他地域で参考となるポイント】

- ・「粕田伝統芸能復活モデル」は、地域の環境資源である集落行事（酒こし舞、稲作、どぶろくづくりに関わる行事）に着目し、その集落行事の復活の過程で、次世代の地域づくりを担う人材の育成を図るものである。
- ・このモデルは、地域の行事や伝統文化に関して、次世代を担う住民（生徒等）を集落行事の継承者として確保を図るとともに、集落の特徴的な行事を基に、都市農村交流へと展開を図ることを期待するものである。

地域における気づき

- ・地域の郷土史研究会等と連携し、地域資源の掘り起こしを図る。
- ・地域の古老への聞き取り調査等により、地域の行事の発掘を図り、当時の様子（行事の内容）を把握する。

行事の復活

- ・復活が望まれる集落行事（例えば地域の環境資源の活用に関するかつての知恵を伝えるもの）について、内容を記載している古文書や地域住民の記憶を頼りに、地域住民有志により、ひとまず復元を図る。
- ・次に、伝統芸能フェスティバルなど、イベントに参加し、地域のアピールを行うとともに、イベントへの参加の機会を活かし、実演者たちも技術の向上を図る。

行事の継承

a) 地元学校との連携、異なる世代間交流

- ・集落行事の復元を行い、行事内容が再度確立されたのち、後継者の育成を図る。
- ・まず、それまで有志で活動してきた体制から、地元組織として、「（集落行事名称）保存会」など、保存・継承組織を立ち上げ、諸活動の中核の体制を整備する。
- ・次に、例えば、地元の小・中学校、高校に伝統芸能クラブを設立し、次世代を担う生徒に集落行事の継承を図る。
- ・学校のクラブ活動時の指導者として地域の古老が参加するなど、異なる世代間交流を図り、あわせて、地域で代々受け継がれてきた、環境資源の活用方法などについても、親世代から子世代へと継承を図る。

b) 行事の記録

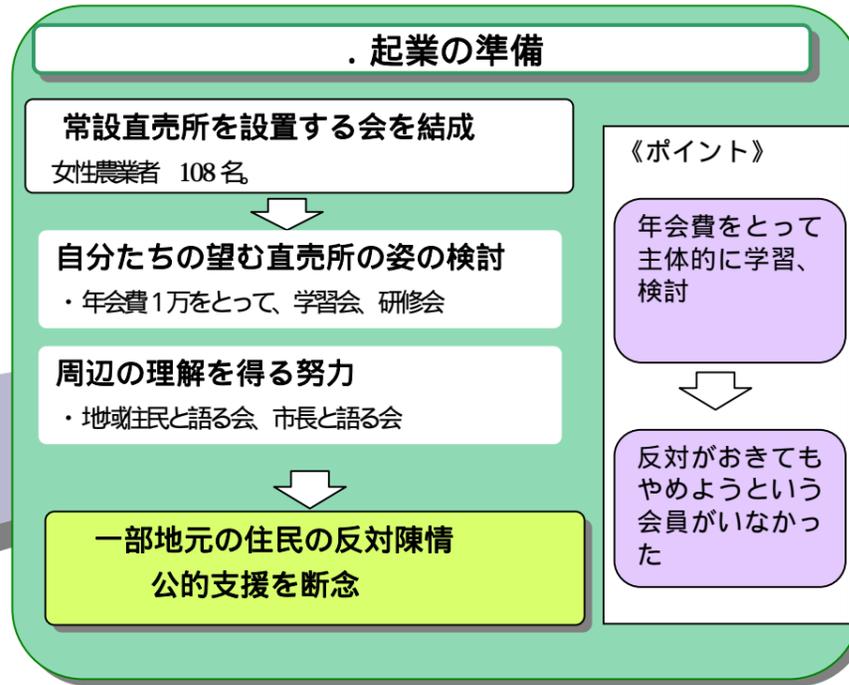
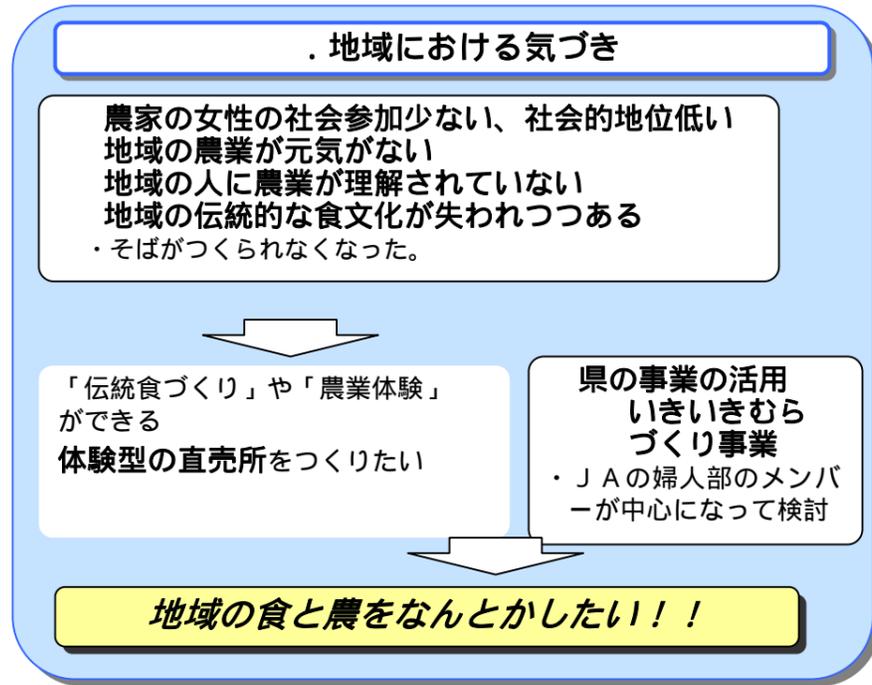
- ・集落行事を再現し、その行事内容の記録を図る。
- ・記録は、地域行事を将来に伝えるものであり、笛や太鼓などの演奏に関しては普及用の楽譜を作成し、後継者育成にも活用を図る。
- ・また、画像や行事の動画などは、集落ホームページ（野口モデル参照）等への掲載など、その多様な活用を図る。

事業継続のための収益源確保(コミュニティビジネス化)

- ・伝統芸能継承に係るコストを、持ち出しではなく自立的に確保できる体制をつくる。
- ・事業化の例としては、有料撮影会の開催（伝統芸能の写真をとりたいという希望者がいる）、有料の定期講演会の開催（毎月祭りや行事があることから年間を通じた展開が可能）、他の伝統芸能（県

北には太鼓や獅子踊り、駒踊り等多数存在)と連携した伝統芸能を訪ねるツアールート形成、地域の体験型直販所が実施するグリーンツーリズムとの連携(伝統芸能の実演・体験、農業体験等の受け入れ、直販所への参加と農作物の販売等)が考えられる。

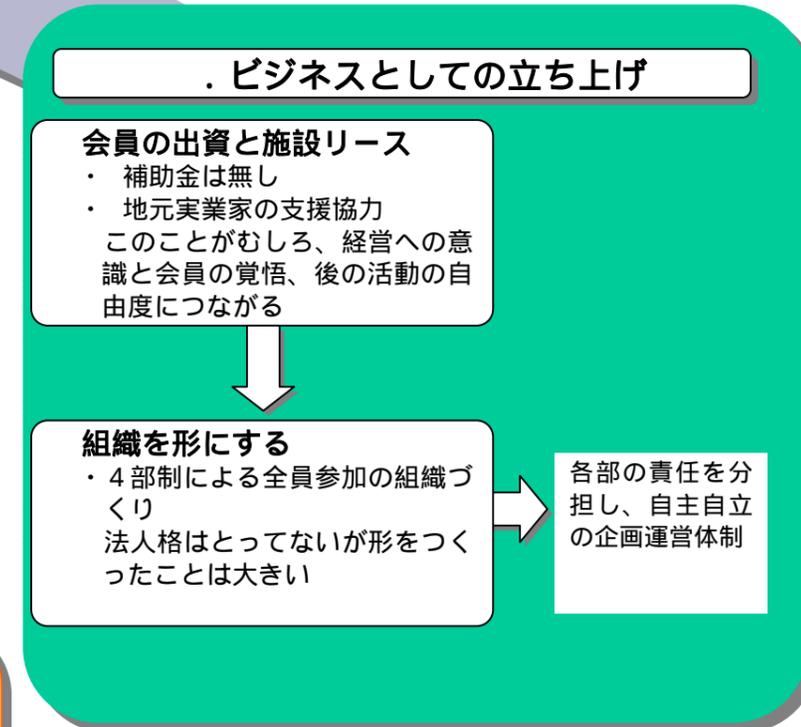
- ・これらで得た収益は、伝統芸能継承のための衣装や材料費、人材育成のための講師招聘料、事務局経費等にあてるとともに、さらに、酒こし舞の舞台となる水田景観の再生整備にあてる。
- ・このような収益性をもたせることは、事業の継続性を確保するとともに、参加者にはりあいを生む。また、同時にこれらの収益事業の実施により、外部からの来訪者が増えたり他の団体・地域等との交流により、地域の活性化に資する。



単なる直販所ではなく、体験交流（たんぼづくり体験を店のメンバーが指導）



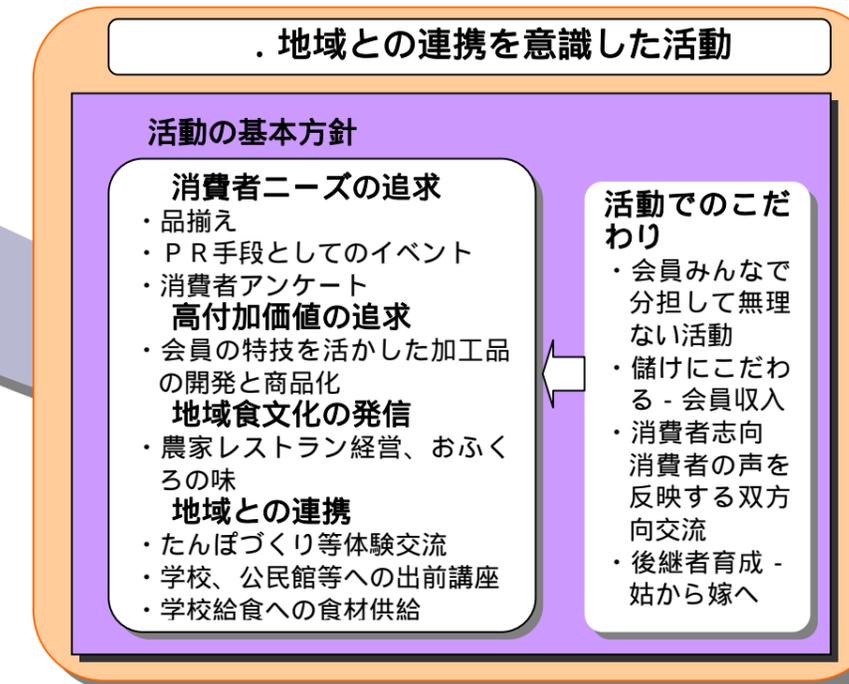
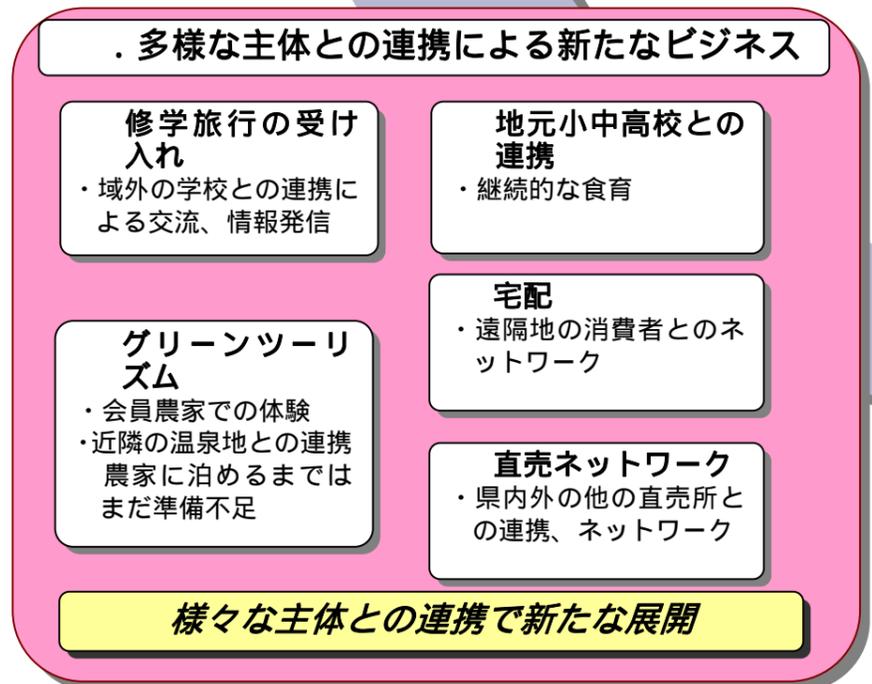
なぜこの土地でそばがつくられてきたのかを解説することで、参加者の地域の環境と食の関心の理解を深める



体験・交流を通じた食文化の継承と農業活性化



農作物の直販に加え、付加価値をつけた加工品を開発、販売



関連資料：個別調査編「第5 社会実験結果」参照

【農と食の交流ビジネスモデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・「農徒食の交流ビジネスモデル」は、農家の女性が体験型直販所を設置することで、地域の食文化の復活・継承、食の安全の確保と、地域の農業の活性化を図るものである。

ポイント

- ・このモデルは、家庭での食を担う女性が、食を通じて地域の食文化と農業の活性化をはかっている点、これをビジネスとして成功させている点が注目される。

地域における気づき

- ・県の事業がきっかけとなり、農家女性の社会参加の少なさや、地域の農業が停滞していること、地域の人に農業が理解されていないこと、地域の食文化が失われつつあることに気づく。
- ・農家の女性が中心となって取り組んでいることは、今後の他地域における地域づくりのポイントとなる点である。

起業の準備

- ・これらの課題を解決するために、常設の直販所を設置することをめざす。
- ・その過程で、自分達が望む直販所の姿を、自分達自信で学び、考える。特に、学習会や研修会の費用としてメンバーから年会費1万を徴収しているところが注目される。
- ・また、直販所設置を地域住民に理解してもらうため、さまざまな機会をとらえて地域への説明や地域との意見交換を実施する。

ビジネスとしての立ち上げ

- ・公的補助を受けず、会員の出資を募る。施設は地元実業家の支援によりリース方式で事業をたちあげる。公的補助を受けていないことが、その後の活動の自発性と自由度を高めたといえる。
- ・また、立ち上げ当初から組織を形する。全員参加型組織とし、各部署の責任と分担を明確にする。
- ・さらに、利益をあげること、利益を会員に還元することを徹底する。会員は収入を得ることで、喜びややりがいを感じる。収益にこだわることは、ビジネスとして成功するポイントであるといえる。

地域との連携を意識した活動

- ・地域の消費者のニーズを、アンケート等で把握し、これに応じた品揃え、PR等を行う。
- ・地域の伝統色を提供する農家レストランの開設、学校や公民館等への出前講座、学校給食への食材提供等、地域の食文化、地域の消費者や子ども達との関わりを常に重視した活動をする。

多様な主体との連携による新たなビジネス

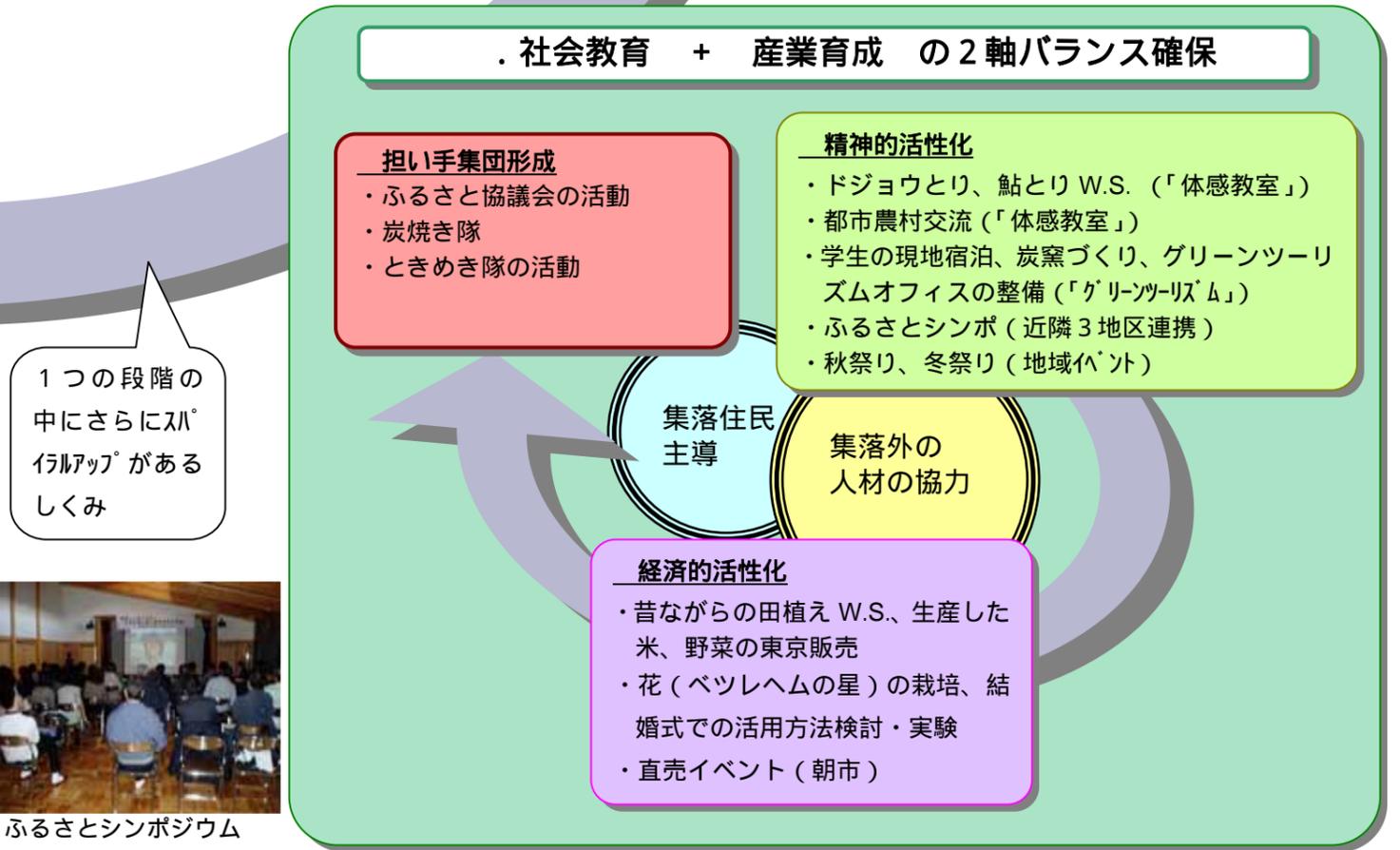
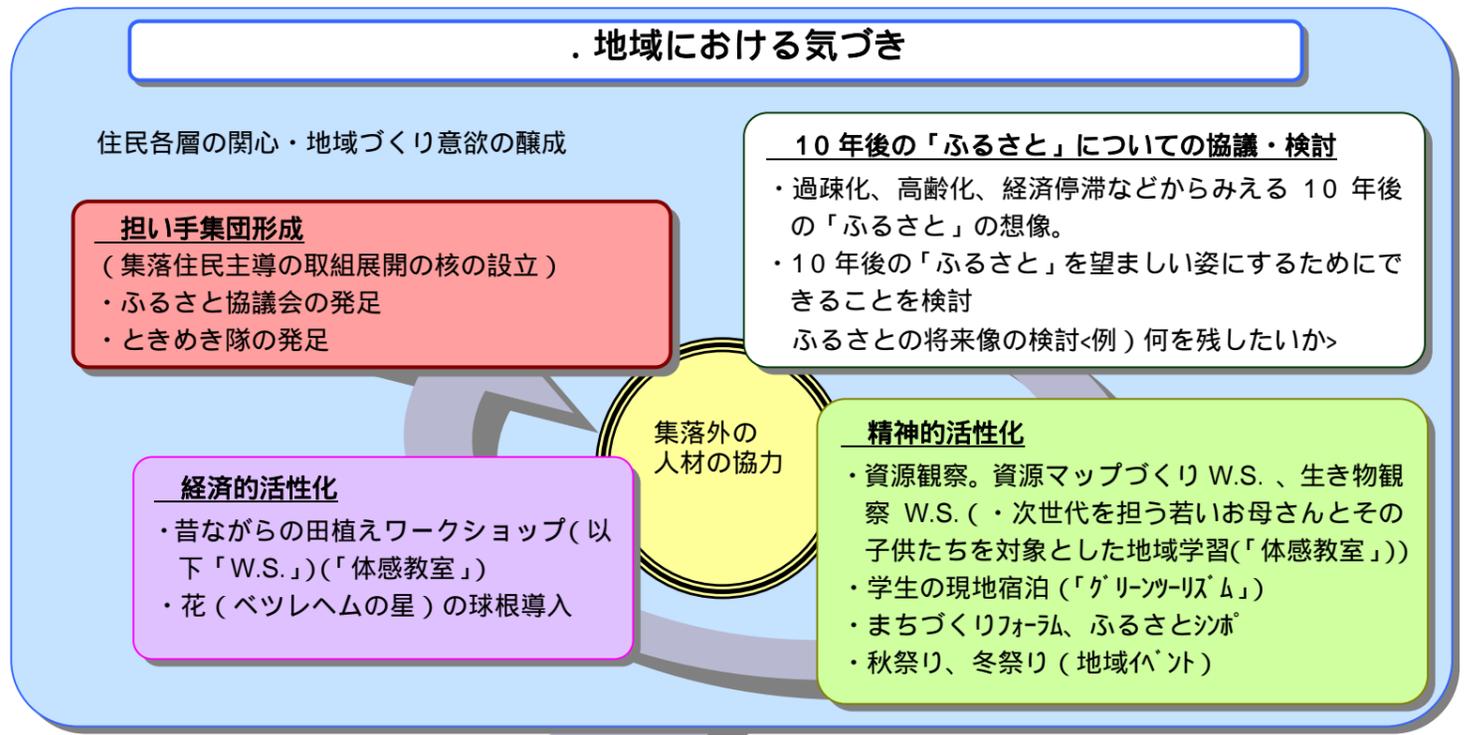
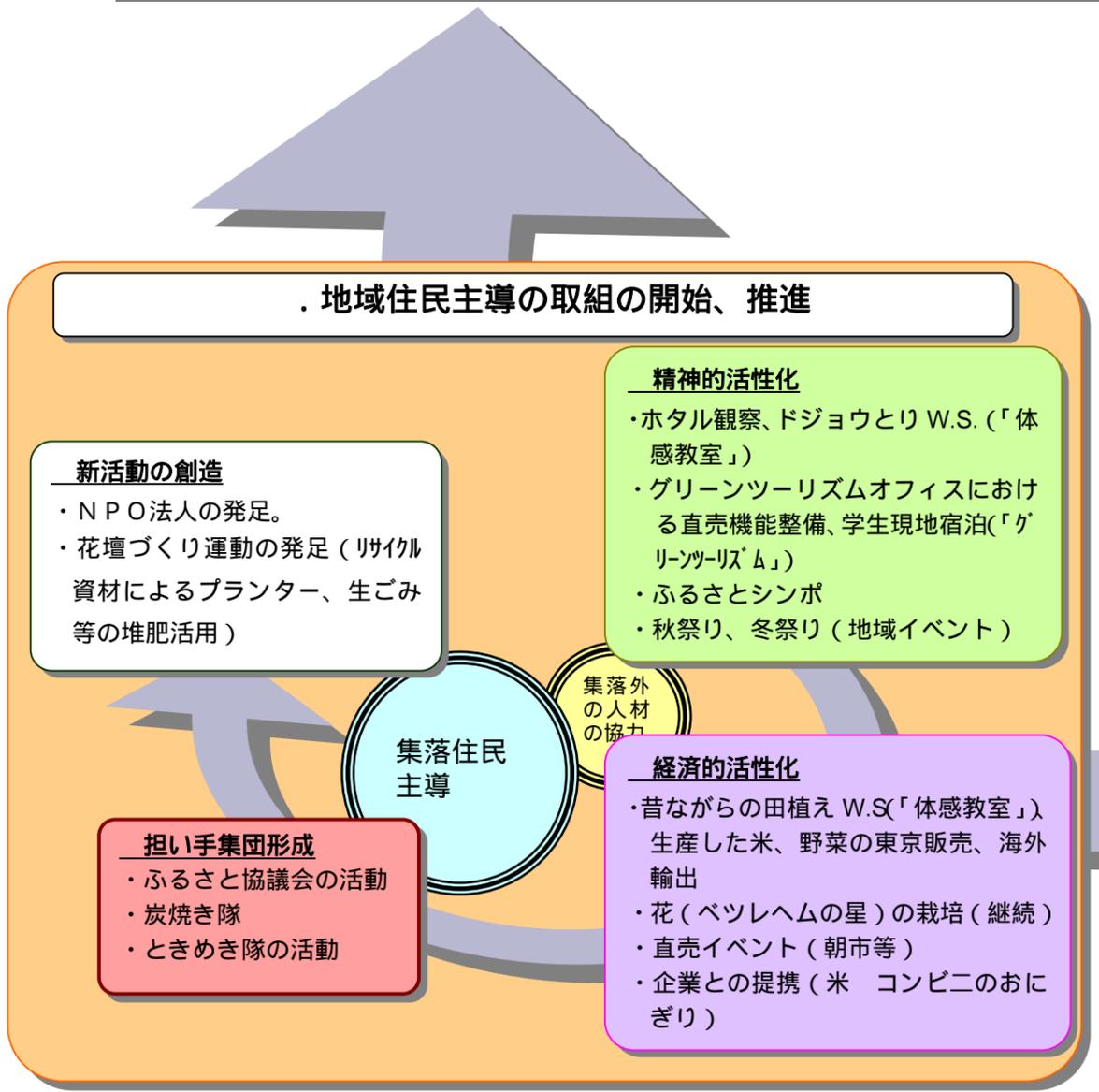
- ・周辺宿泊施設と連携した修学旅行の受け入れやグリーンツーリズムの実施、他の直販所との連携等、多様な主体との連携により、新たなビジネスを展開する。

陽気な母さんの店：

平成9年からスタートした生活研究グループで、小さい直売所を始めたのがきっかけ。農業への強い思いが原動力となり、その思いを地域の内外へ伝えたいという希望から直売所の活動をはじめた。

農産物・加工品等の直売の他、食堂、弁当・仕出し、野菜宅配、体験室におけるきりたんぽ作り等の農業・郷土料理体験など、活動内容は多岐にわたる。

集落住民主導による新たなアグリビジネスの開発
農村資源を活用したグリーン・ツーリズムの展開



田植え体験 W.S.(体感教室) 東京での米の直接販売 直売イベント(朝市) 花(ベツレヘムの星)の結婚式での利用 ふるさとシンポジウム

写真出典)「環境共生型に配慮した体験型ツーリズム開発の可能性調査 訪問される魅力的な農村づくりへの取組」(荒樋豊、H19.3)

【常盤体験型ツーリズムモデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・ 集落外の主体の活動により、地域の経済活性化に向けた取組のきっかけが生まれ、しだいに集落住民と集落外の主体との協働体制が構築され、やがては集落住民が主体となって地域の活性化を図るものである。

ポイント

- ・ このモデルは、集落外の主体の取組をきっかけとして、いかに集落住民主体の取組に発展させるかの取組事例として参考となるものである。各段階の取組ごと、成果を積み上げ、交流を重ね、次の段階に進むという段階的な発展の中で、集落住民が自信をつけ、やがては主導的な役割を担うことを期待するものである。

地域における気づき:集落外の人材の協力により展開

10年後の「ふるさと」についての協議・検討

- ・ まず、過疎化、高齢化、経済の停滞傾向の中、10年後の「ふるさと」について想像する。
- ・ 一方、10年後の望ましい地域の将来像を考え、上記の10年後の「ふるさと」から、いかに望ましい将来像に近づけるか、地域住民が外部の協力を得つつ、できることを検討する。

精神的活性化

- ・ 次世代を担う若いお母さんとその子供たちを対象に、地域学習（体感教室）を実施し、地域に対する認識を深める。体感教室のプログラムとして、資源観察、資源マップの作成、地域の生き物観察等が考えられる。
- ・ 地域の取組を集落外から支援する人材（例えば学生、研究者等）を集落内に宿泊させることで、民泊等、グリーンツーリズムの試行を行う。
- ・ 取組の成果を発表するフォーラム、シンポジウムを開催する。発表までの作業を通じて、活動の振り返り、成功体験の確認・積み重ねを行う。

経済的活性化

- ・ 上記体感教室での取組の延長で、生産した作物（米）を販売し、生産、価格決定、販売の基本を学ぶ。

担い手集団形成

- ・ 外部人材の取組に触発され、地域住民が主体となる、地域づくりの担い手集団を形成する（「ふるさと協議会」の発足（地元組織）および「ときめき隊」（活動組織）の発足）

社会教育 + 産業育成 の2軸バランス確保:集落の住民および集落外の人材の協働により展開

精神的活性化

- ・ 上記「気づき」における「精神的活性化」の取組を発展させ、体感教室の一環として都市農村交流を行う。（東京での直販の支援組織との交流）
- ・ グリーンツーリズムオフィス（窓口、各種企画検討）の整備。
- ・ 今後の地域づくりの展開に欠かせない、近隣地区も含めた広域連携を目指すため、近隣地区も参加するふるさとシンポジウムを開催する。

経済的活性化

- ・ 東京での農産物の直売、朝市の実施、花卉栽培の推進等、地域経済の活性化に寄与する取組の試

行を継続する。

担い手集団形成

- ・ふるさと協議会等既存の組織の活動を継続するとともに、「炭焼き隊」など、新規の活動組織の設立を促す。

地域住民主導の取組の開始、推進

精神的活性化

- ・グリーンツーリズムオフィスにおいて、地域の農産物を直販する部門・機能を追加し、
、 の取組について地域住民主導で展開を図ることを可能とする。

経済的活性化

- ・東京での直接販売や海外での販売、コンビニエンスストアチェーンとの提携など、地域の農産物の販売経路の拡大を図る。

担い手集団形成

- ・既存組織の充実化を図る。

新活動の創造

- ・地域づくり会社、グリーンツーリズム促進、産業育成を担う、地域住民によるNPO法人の立ち上げを図る。
- ・グリーンツーリズムの舞台となる集落の修景の一環として、また地域の環境資源の有効活用を考
える取組として、能代市街地からの生ごみ堆肥と常盤の間伐材を使ったプランターにより、都
市・農村住民の協働による花壇づくりを展開する。

(7) 八郎太郎伝説モデル
 ~ 伝説を活かした新たな学びのツーリズム
 と環境保全 ~

【参考】八郎太郎伝説
 鹿角の里に、背が高く、力の強い八郎太郎という若者が住んでいました。ある日、仲間と3人で山に入って仕事をし、八郎太郎が炊事当番をしていました。川でイワナを3匹見つけ、仲間と1匹ずつ食べようとつかまえたのですが、あまりのおいしさに一人で全部食べてしまいました。するとまもなくのどが渇き、川で水を飲み続けると、気がつく頃には龍に変身していました。龍になった八郎太郎は、沢から流れる水をせき止め、十和田湖を作って主になりました。
 しかし、八郎太郎は法力のある南祖坊というお坊さんとの死闘に敗れ、十和田湖を追い出されることになります。大湯川、米代川を下り、米代川中流部の八座山と加護山にはさまれた狭い部分をせき止めて住むことにしました。困った八座山の神々様は、八郎太郎を追い出そうと力自慢の天神様にお願いし、天神様は、八座山の岩を遠くまで投げて八郎太郎に勝ちました。ところが、龍の体に米代川は浅く、前へ進むことができなかったため、白ネズミたちに堤に穴をあけさせ、八郎太郎を八座山から立ち退かせたということです。この時の力比べで山が一つなくなり、七座山となりました。
 八郎太郎はさらに米代川を下り、八郎瀉を作ってすみかとなりました。そして、永遠の美しさを願ったばかりに龍に姿を変えた田沢湖の辰子姫に恋をし、通い始めました。そのため、冬には八郎瀉が凍り、田沢湖は凍らないのだといわれます。この一連の伝説が「三湖物語」です。



「八郎太郎誕生の地」石碑
 (鹿角市十和田草木)

環境資源の本来のあり方に則した持続的活用
 「ストーリー」を縁とした交流

地域における気づき
 ・ 地域の伝説等の見直し、発掘
 ・ 地域の環境資源と伝説等との関係整理

本来の資源性をふまえた地域づくり
 本来の環境資源のあり方の確認
 ↓
 本来の環境資源の姿に復元(自然再生 等)
 ↓
 地域全体の再生、活性化
 伝説を手がかりに、地域と住民とのつながりの強化、地域の原風景の再生・継承

地域間交流の展開
 郷土への関心の醸成
 ↓
 伝説を通じての、地域間(北東北)の交流
 ↓
 郷土の魅力の再認識
 地域の産物、加工方法を見直し、地産地消の推進

環境資源の広域的なエリアに展開するストーリーへの位置づけ
 既存のストーリー展開への位置づけ
 ↓
 ストーリーから再度環境資源の資源性の見直し
 ↓
 資源の魅力増進
 「三湖物語」等のように、広域に分布する資源のネットワーク化、観光活用(資源の資質を損ねない活用)

例) 八郎太郎プロジェクト
 (環八郎湖・水の郷創出プロジェクト)との連携
 ・ 参加型・協働型
 ・ 水辺の再生、自然の浄化力向上等



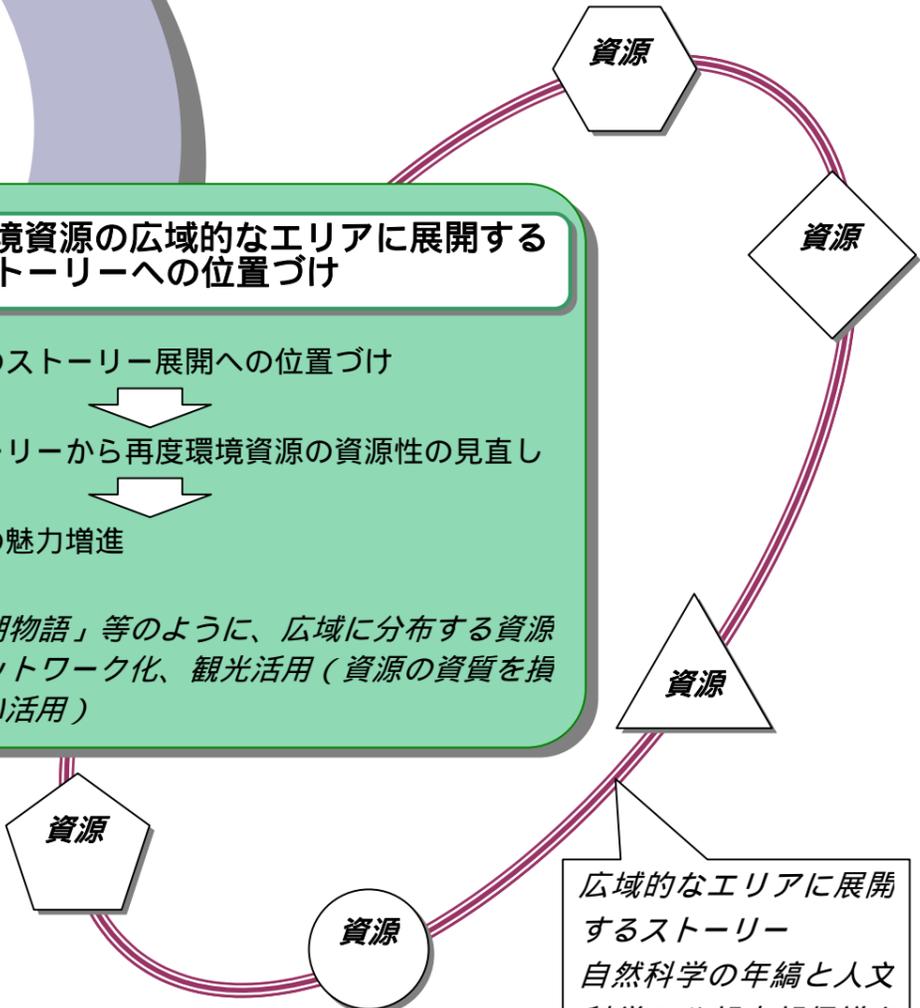
男鹿市五明光の八郎祠
 (干拓工事で場所が移動)



瀉周辺で一番古い富岡の八郎石祠(文政四年)



「八郎の井」伝説地: 八郎足洗いの井戸跡(塩口)



広域的なエリアに展開するストーリー
 自然科学の年縞と人文科学の八郎太郎伝説を結びつける 等

【八郎太郎伝説モデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・「八郎太郎伝説モデル」は、地域の伝説等を見直しまたは発掘し、伝説等の内容、伝説に関わる地域の環境資源の本来の姿に関する認識を通じて、地域への関心の醸成、地域の環境資源の再生等を図るものである。

ポイント

- ・このモデルは、地域の環境資源に関して、広域のエリアに展開するストーリーからその資源性を見直し新たな観光資源となることを期待するものである。
- ・また、広域のエリアとの関係が発端となり、地域間の住民の交流に発展することを期待するものである。
- ・そして、上記の取組を通じて、環境資源の当該地域に存在する意義が地域の人々に見直され、また、その「見直し」を通じて、その環境資源が持つ本来のあるべき姿が理解され、本来のあり様に則したワイズユースがなされることを期待するものである。

地域における気づき

- 伝説は人と自然の関係のシンボライズされたもの
- ・地域の伝説等を見直し、発掘を行い、その内容から、地域の本来の姿や、現在の地域の環境が形成された背景を学ぶ。
- ・伝説等とかかわりのある、地域の環境資源を抽出する。

環境資源の広域的なエリアに展開するストーリーへの位置づけ

- ・発掘した伝説等、環境資源に関して、「八郎太郎伝説」や「菅江真澄の足跡」など、広域的なエリアで展開するストーリーとの関係性を確認する。
- ・その際、現存するものはもとより、かつてあったが現在はなくなってしまった、もしくは忘れられている資源についてもストーリーとの関係性を確認する。
- ・関係性については、ストーリーに直接関わるものの他、ストーリーが展開する時代（同時代性）、舞台（地形、水系）、類似資源（同じような伝承）との関係にも留意する。
- ・次に、広域的なエリアで展開するストーリーへの当該地域の環境資源の位置づけを行う。
- ・資源単体では潜在的な魅力まで伝わらないが、ストーリーに位置づけることで潜在的な資源を浮かび上がらせるとともに、更なる資源性の増進を図り、かつ、その資源性を損なわない範囲で、広域に展開する観光ルート等を活用し、地域の観光振興を図る。

地域間交流の展開

- ・ 広域的なエリアで展開するストーリー等に基づき、関連する地域間で住民の交流を図る。
- ・他地域との交流を通じて、郷土の魅力を再認識する。
- ・さらに、地産地消など、地域の産物の見直し、加工技術の保全・継承などへの展開を図る。

本来の資源性をふまえた地域づくり

- ・環境資源の本来のあり方を、ストーリーから検証し、本来のあり様に可能な限り復元を図る。（例えば、祠の位置を本来の場所に戻すなど）
- ・上記の取組を通じて、地域住民の環境資源への関心を高めるとともに、郷土愛の醸成を図る。

北秋田の環境史発見ルート(八郎太郎伝説ルート例) : 八望台(又はG A O)を年縞の学習拠点(年縞博物館)として、八郎太郎伝説をとおりて過去のでき実際に伝説地を訪れて(体験して)学ぶ。

年縞博物館での学習
八望台又はG A O

北秋田の主要な八郎太郎伝説地めぐりへ

八郎太郎の三湖伝説を中心に



4. 八郎太郎と八郎瀧
洪水と共に流された八郎太郎は、鹿戸(旧琴丘町)の天瀬川に流れついた。
親切な老翁、老婆に泊めてもらったが、夜中に神に祈願して恩荷島(男鹿島)と陸を繋いで湖を作る許しを得た。
太郎は二人に大地震が起こると立ち退かせたが、老婆が忘れ物の麻糸を取りに戻っているうちに大地が鳴動して湖(八郎瀧)が出来てしまった。
太郎は弱れそうな老婆を足で蹴って芦崎(旧八竜町)に上げたが夫婦は別れ別れになってしまった。
<漁業神、龍神の八郎太郎>
八郎瀧周辺には八郎太郎を祀った神社・祠等が数多い。八郎太郎は、漁師に恵みをもたらす漁業の神、また、雨をもたらす龍神であったともいわれる。それらの痕跡は、瀧の埋立とともに忘れ去られようとしている。

3. 天神様と八郎太郎
七座山近くの米代川を堰き止めて住処とした八郎太郎を追い払おうと、八座の山の神様のうちの七座の天神様が、自ネズミに命じて湖をつくっている山に穴を空かせせ洪水を起こした。その洪水の波に乗って八郎太郎は米代川を下った。
この洪水の為、八座あった山は七座になったという。
<瀧の八郎の伝承>
807年、七座山のところで「瀧の八郎」という異人が米代川を堰き止め、鷹巣盆地が3年にわたって水底に沈んだという伝承があり、実際の洪水体験を語り継いだといわれる。

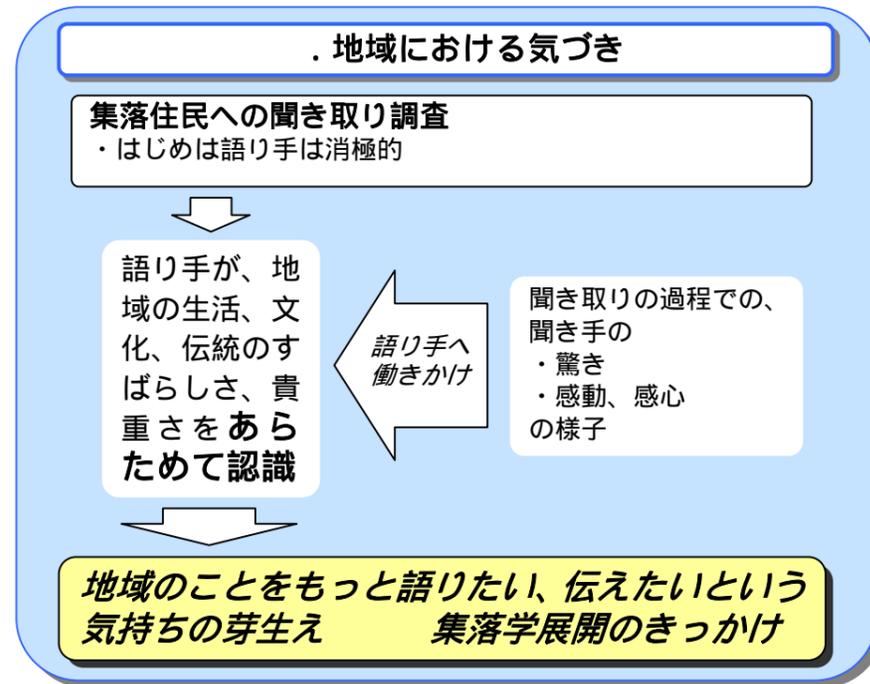
2. 八郎太郎と南祖坊
紀州熊野の南祖坊が十和田湖を訪れた時草鞋の緒が切れた。熊野権現のおかげに従って、草鞋の緒が切れたこの十和田湖に住む場所と決め、八郎太郎と争いが始まった。
七日七晩の戦いの果て、八郎太郎は敗れて逃げ、七座山近くの米代川を堰き止めて湖を作って住処とした。
<八郎太郎と南祖坊の戦いと十和田火山噴火・米代川洪水>
915年に起こったといわれる十和田火山噴火とその泥流による米代川洪水が、この戦い伝説の起源といわれる。

1. 八郎太郎と十和田湖
草木の村に住む八郎太郎というマタギが仲間と猟に出かけ、太郎が飯の支度をするなかで、岩魚を焼いて仲間を待たせたが、こらえきれず全部食ってしまった。すると急にのどが渴き、夢中になって水を飲み続けたところ、大蛇になってしまった。そこに大きな湖を作って住み着いた。
これが十和田湖だといふ。
<マタギの掬をやぶった八郎太郎>
「仲間を置き去りにしない、食べ物は分かち合う、収穫は平等に分配」これがマタギの掬。

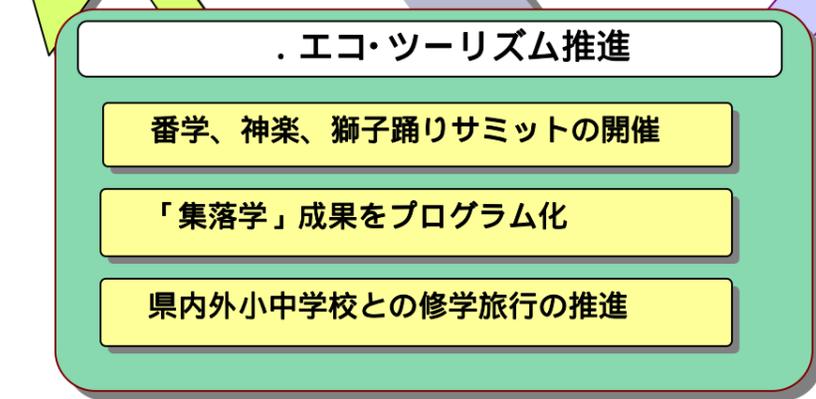
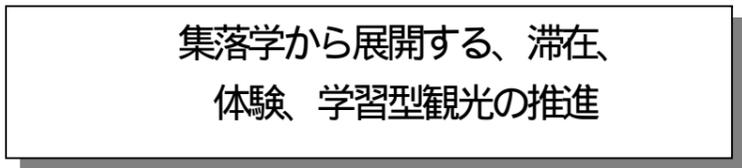
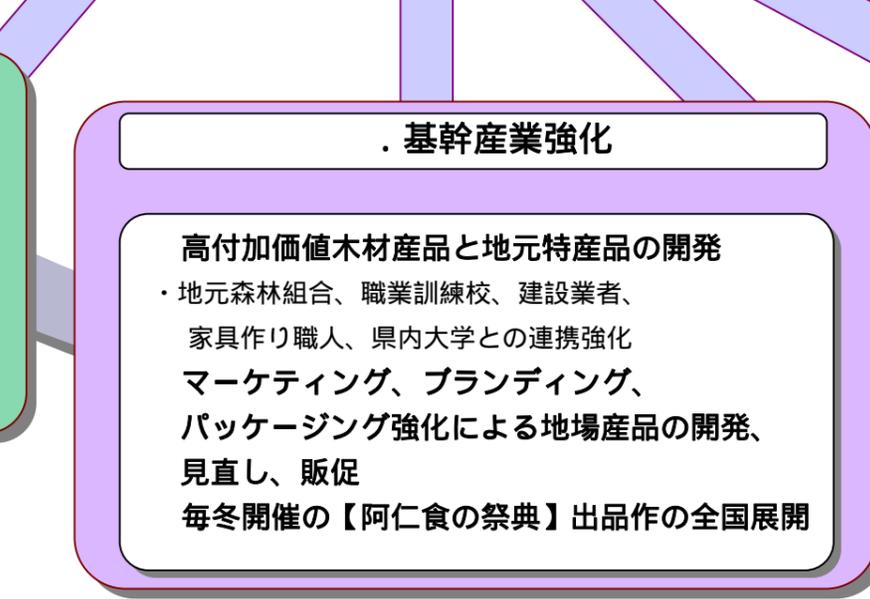
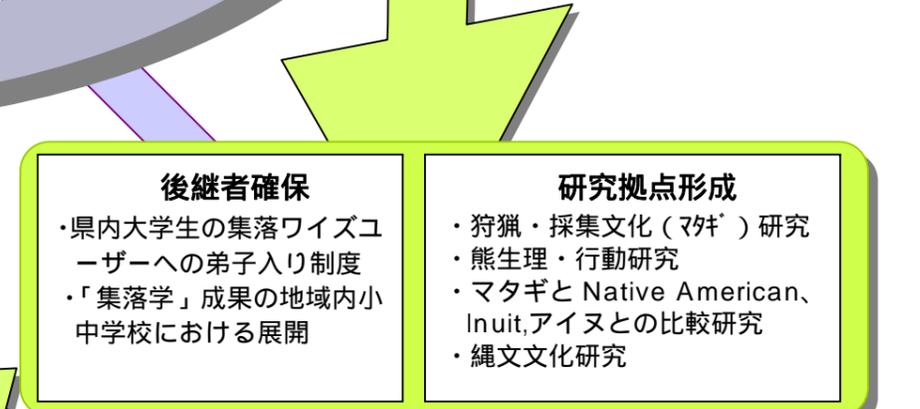
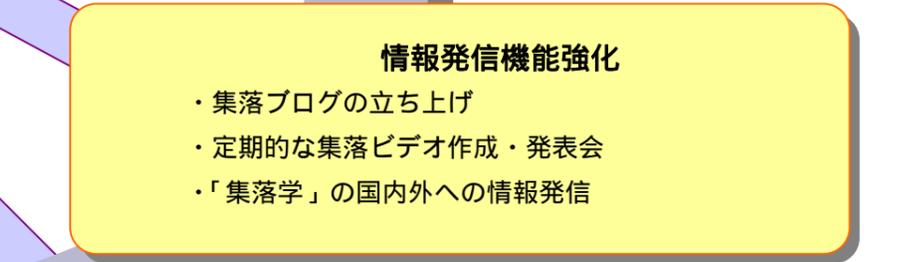
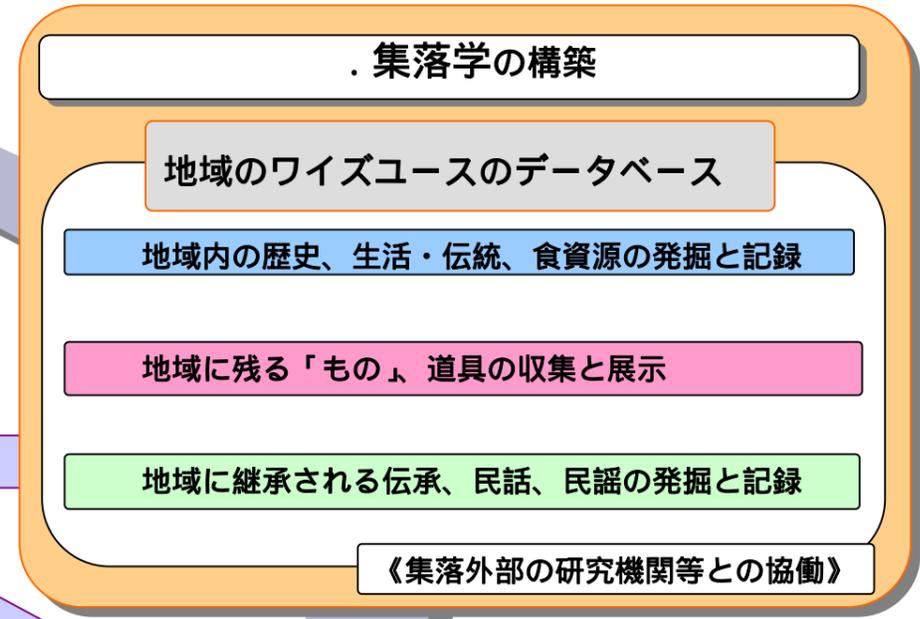
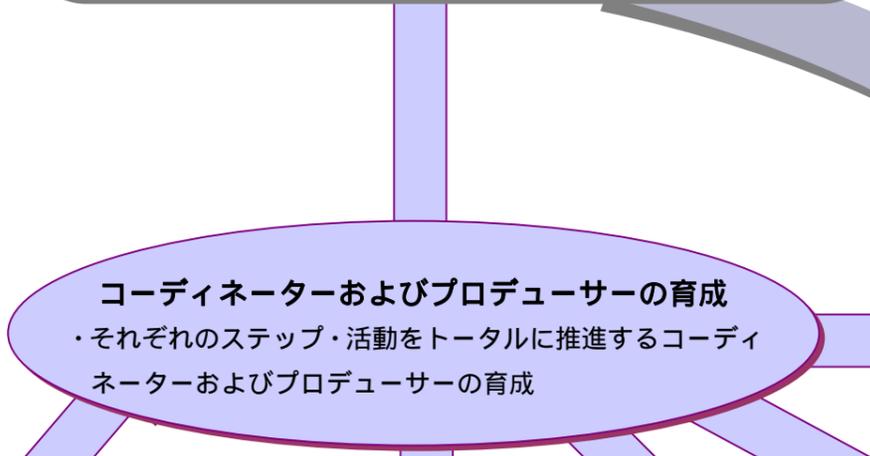
5. 八郎太郎と田沢湖
八郎瀧を住処としていた頃、田沢湖には辰子竜が住んでいた。
八郎太郎と南祖坊はともに辰子竜にひとめぼれしたため、田沢湖上で激しく戦い、太郎は南祖坊を十和田湖へ追い返した。
太郎と辰子竜は夫婦の契り結び、冬は田沢湖で一緒に暮らし、夏だけ八郎瀧に帰って来る。
そのため、田沢湖は冬でも凍らないが、八郎瀧は凍結すると言われる。

一ノ目瀧と八郎太郎
一ノ目瀧の娘は、無理に押しかけてくる八郎太郎を退治してほしいと、武内神主に頼んだ。
神主が八郎太郎を弓で射ると当たった。しかし、八郎太郎は矢を抜き取り、「子孫七代まで片目にしてくれる」と叫びながら、投げ返した矢は神主の目に当たった。

(8) 阿仁マタギの知恵モデル
 ~地域のワイズユースの継承と担い手の育成~



聞き取り調査風景



写真出典)「秋田県北、北秋田市阿仁地区、八峰町八森地区における生活・文化資源の検証と持続的地域づくりプロジェクト」(国際教養大学地域環境研究センター、H19.3)

【阿仁マタギの知恵モデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・「阿仁マタギの知恵モデル」はマタギ文化、根子番楽に代表される伝統芸能、地元材を活用した道具、山菜、熊肉などを活用した食にまつわる多様な山村資源を地域住民と地元の大学が「集落学」として構築しつつ、その成果を滞在、体験、学習型観光としてのエコ・ツーリズム推進のツールとして活用するものである。

ポイント

- ・地域資源の再評価とそれらの継承作業としての【集落学】構築においては地域住民の内発性および喜びが伴うべきである。
- ・集落学の成果は継続的に国内外へ情報発信されなければならない。またその体制作りが重要である。
- ・地域に継承される各種山村資源を生業の営みの中で完全復活することをいきなり目指すのは無理がある。時間のある時に地域の子供たちへの総合学習として、また県内大学生との交流ツールとして活用しながらの継承が現実的である。
- ・一方でエコ・ツーリズムの推進によって地域にお金が落ちる仕組みも考えないと集落学も「持続可能」ではありえない。ビジネスとしてのエコ・ツーリズムとのバランスある推進が必要である。

地域における気づき

- ・集落外の人材による、地域住民への聞き取り調査がきっかけとなり、回答する地域住民の中に「地域のことをもっと伝えたい」という気持ちが芽生える。
- ・また、地域住民が、自ら語る地域の環境資源やかつての生活様式に対し、聞き手である集落外部の人材が驚き、感心するさまを目の当たりにし、それら集落の環境資源やかつての生活様式の貴重さに気づくことで、地域住民が地域への関心を取り戻すきっかけとなる。

集落学の構築

- ・の聞き取り調査で得られた情報を、歴史、生活・伝統、食資源等の類型別に整理する。
- ・また、地域に残る貴重な道具（民芸品）などの収集、展示を行う。
- ・さらに、地域に継承される伝承、民話、民謡等の発掘、記録を行う。
- ・このように、集落単位で環境資源、環境資源のワイズユースのための作法を収集、整理、蓄積し、「集落学」を構築する。
- ・情報発信機能の拡充を図り、「集落学」の成果を発信するとともに、県内の大学等の研究機関との連携により研究の後継者の確保、研究拠点の形成を図り、ワイズユースの継承を目指す。

基幹産業強化

- ・集落学で学んだ、地域のかつての環境資源のワイズユースの内容をもとに、環境資源の新たな活用方策を検討する。（高付加価値木材製品の開発、地域独自の食文化に基づく新たな製品の開発等）
- ・基幹産業の強化に際しては、マーケティング、当該地域独自のブランドの構築、パッケージングを十分検討する。

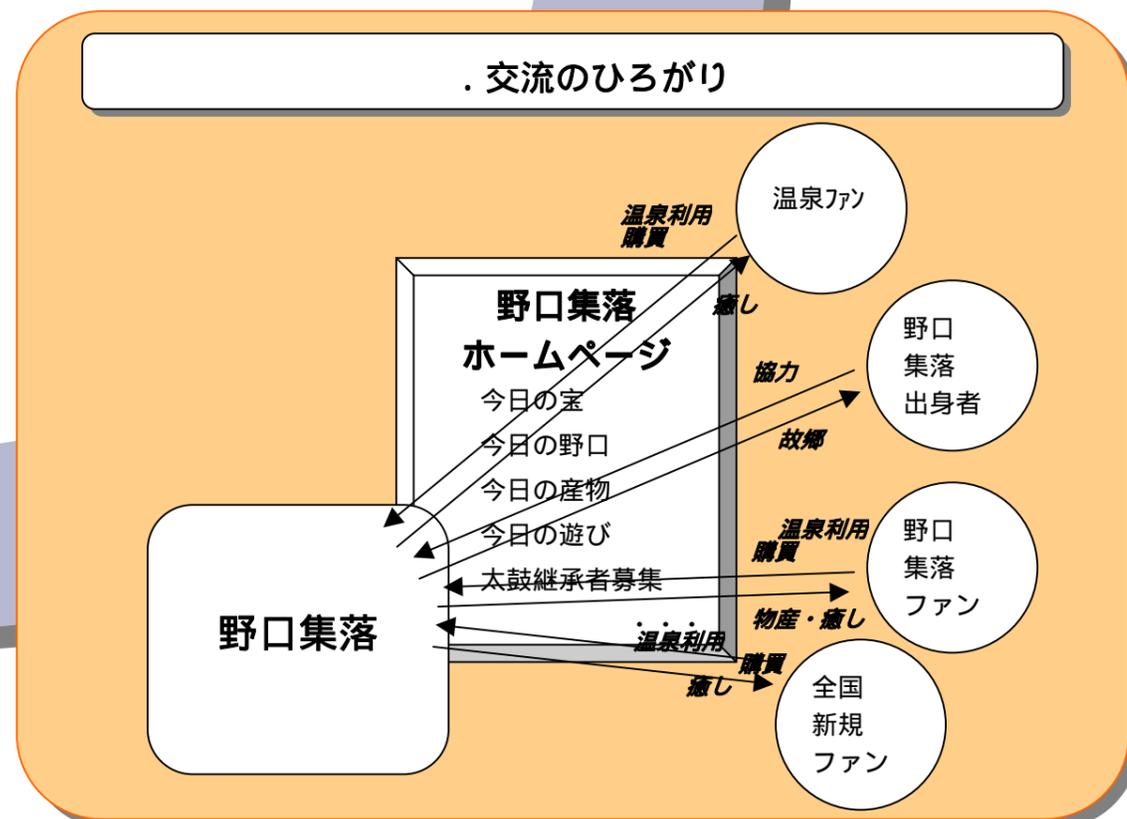
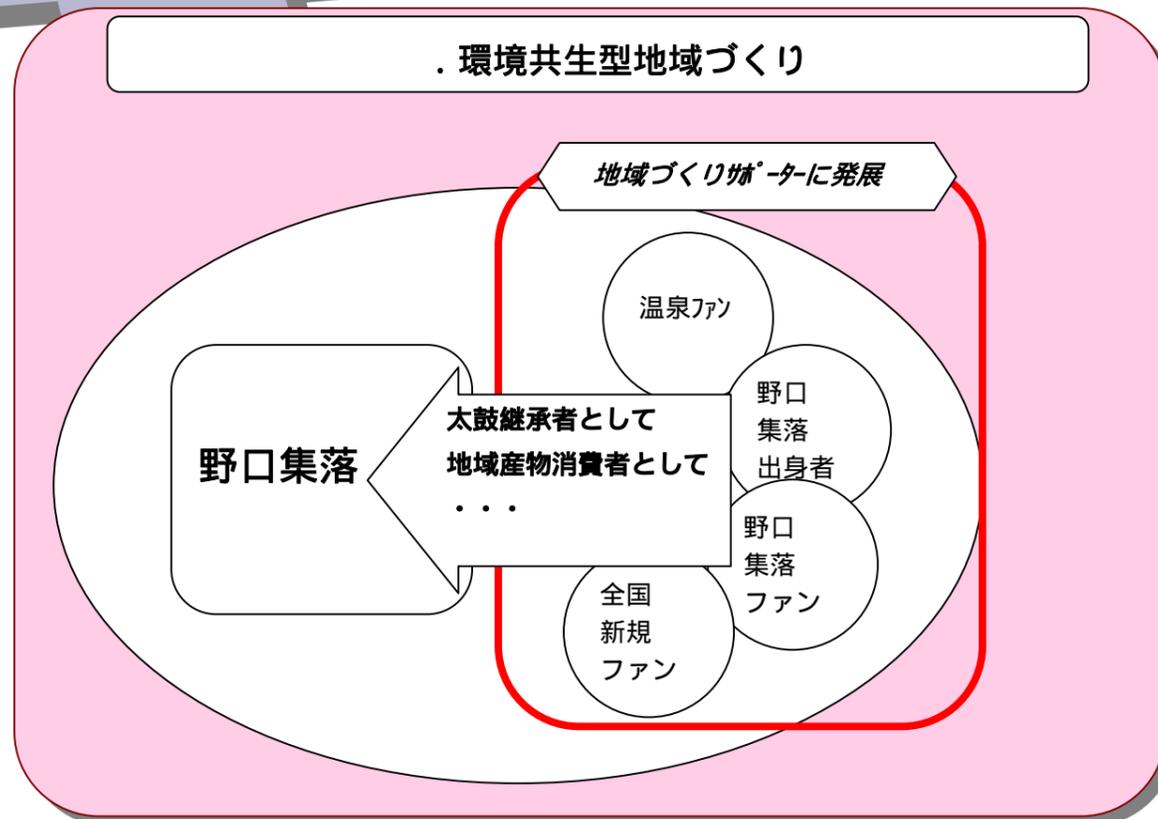
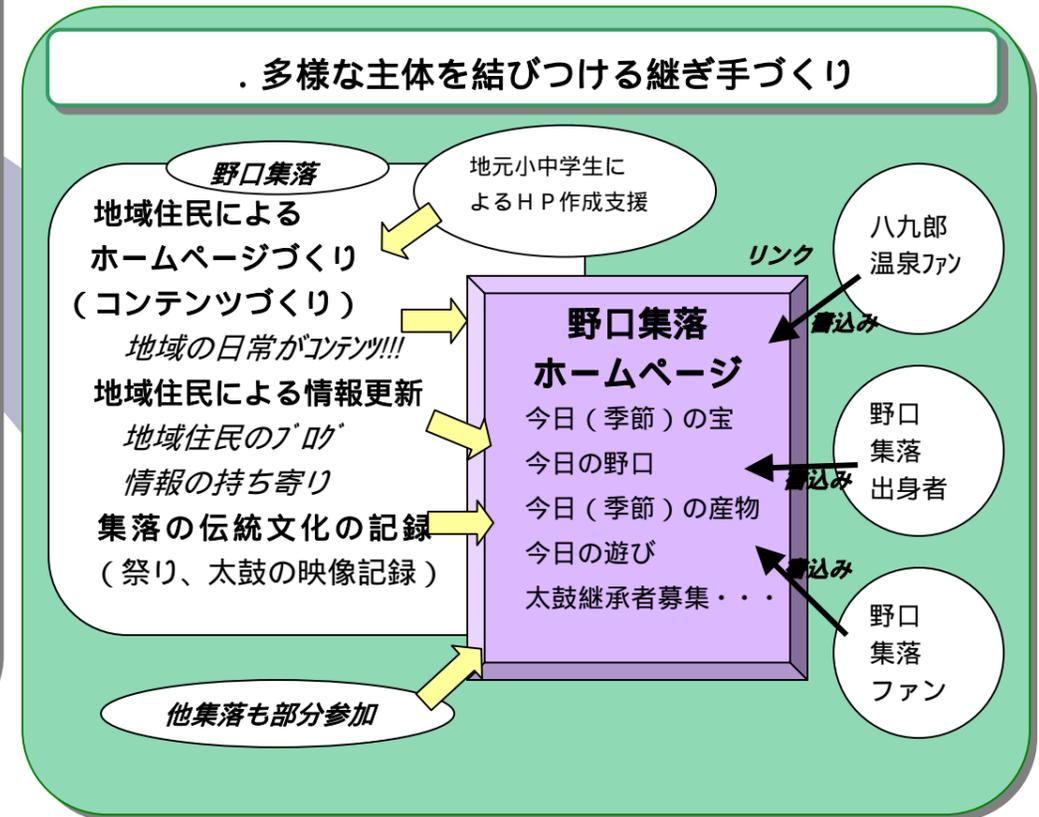
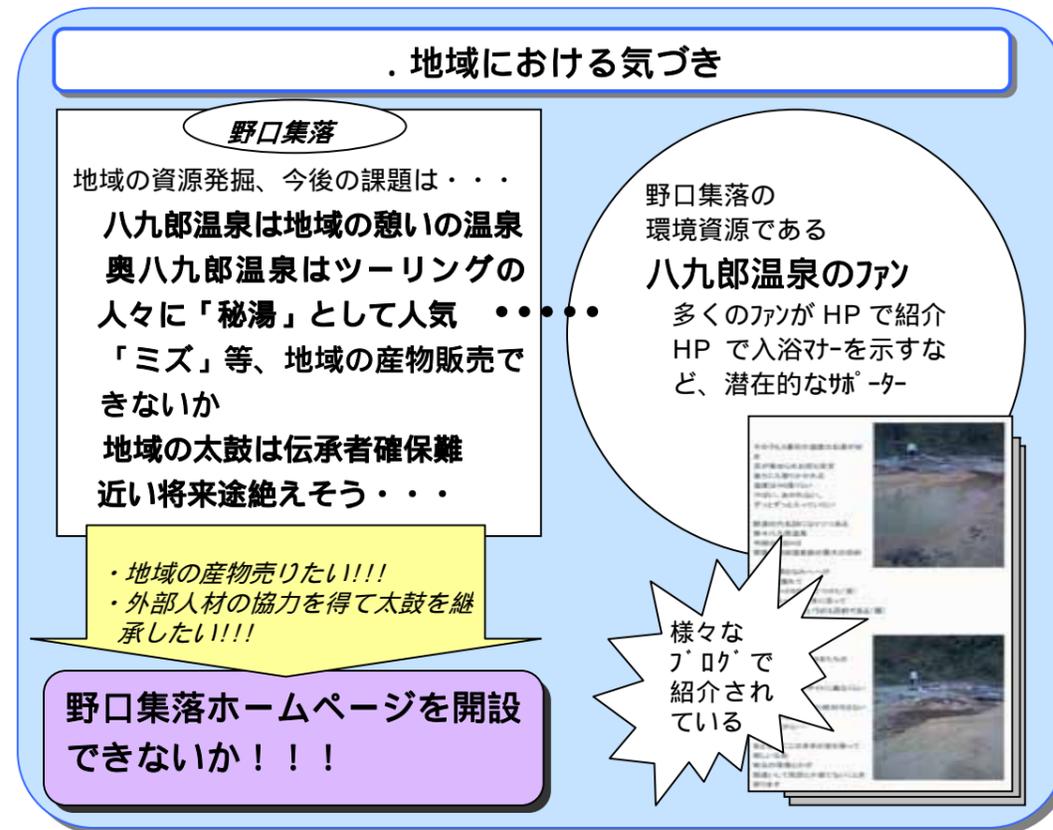
エコツーリズムの推進

- ・集落学により蓄積した情報を元に、地域ならではのエコツーリズムプログラムの企画、運営を図る。
- ・県内外小中学校の修学旅行との連携により、プログラムの試行、商品化を図る。
- ・～ の取組を総合的に推進する「コーディネーター」「プロデューサー」の育成を図る。



秘湯としてファンが多い八九郎温泉
出典) 小坂町 HP

外部人材との交流による活性化



【八九郎温泉サポーターモデルの概要と他地域で参考となるポイント】

概要

- ・「八九郎温泉サポーターモデル」は、地域の環境資源である自然地に湧き出る「温泉」(奥八九郎温泉)に着目し、全国の八九郎温泉ファンとの交流を展開し、野口集落づくりサポーター(地域づくり支援人材)の確保を図るものである。

ポイント

- ・このモデルは、地域の環境資源に関して、集落外部の潜在的な「ファン」を見出し、そのような「ファン」が、集落の伝統芸能の継承者として、さらには、地域づくりに参加する支援主体となることを期待するものである。

地域における気づき(資源発掘手法)

- ・地域における資源発掘の手法について、「ワークショップ形式による資源の発掘」「インターネットによる資源の発掘」の手法例を以下にまとめる。

a) 地域住民によるワークショップ形式での資源発掘手法

- ・既往文献やアンケート調査などにより、事前に地域の環境資源を抽出し、ワークショップに望む。
- ・例えば、以下のような手順で、まずは集落の環境資源を「集落暦」として、1月から12月まで、月ごと、「祭り・行事」、「生業」、「自然の風物」、「食」などの分野別に整理し、皆で思いつく環境資源を検討する。
- ・次に、そのような環境資源の中で、主なものについて、その活用方策を検討する。活用方策の検討は、ある資源に対し、「活用イメージ(ワイズユースイメージ)」を想定し、「誰が」、「どうやって」活用し、その際の「課題」は何かを検討する。

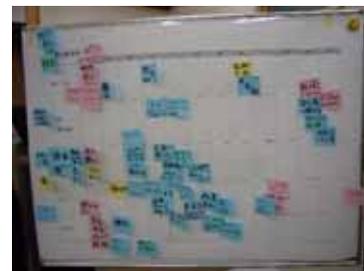
既往文献等による事前の資源発掘

集落暦の作成
(資源の類型区分、整理)

集落資源のワイズユースのあり方検討



ワークショップ
風景



集落暦
の作成

b) インターネットによる検索

- ・一方、地域住民は気づいていないもので、外部の人々から高い評価がなされている環境資源が存在する可能性がある。
- ・そこで、インターネットで、例えば、「字名 温泉」や「字名 古道」、「字名 自然」などのキーワードで検索を行い、地域外部の個人のブログなどから、地域の資源に対する評価を調べる。

多様な主体間を結びつける継ぎ手づくり

a) 情報発信手法

- ・先に検討した環境資源のワイズユースの実施に向け、まず、地域外部・内部に地域ファンを増やすべく、地域の環境資源、地域産物等について広く情報発信を行う。
- ・情報発信の手法として、地域住民の参加によりインターネットホームページを開設する。
- ・ホームページの作成にあたっては、地域住民が主導的立場となり、また、地域の小中学校におけるPCの授業とも連携を図りながら、ホームページ開設後も地域住民が関わるように配慮する。

b) インターネットホームページの運用(更新)

- ・地域住民の日頃の生活、事業者の事業活動に基づく情報を発信する。
- ・ブログなど、地域住民が個人的に、日々更新できるようなコンテンツを設定し、地域の生の声をできるだけ発信する。
- ・技術的な運営に関しては、開設初期は、市町村ホームページの運営体制との連携など、既存の運営体制の協力・支援を得ることとし、運用実績を重ね、やがては地域独自運営を目指す。

ホームページの内容例

- ・集落の季節ごとの宝の紹介（環境資源 「集落暦」を参考に、 集落季節ごとの八景など）
- ・集落の農産物・加工品を紹介（地域住民による、料理の仕方、加工方法もあわせて掲載・解説）
- ・集落住民のブログ（「おばあさんのひとりごと」など、生の声を日々更新）
- ・イベント的な交流プログラムの情報発信
- ・地域づくりサポーター募集・登録（地域で困っていること・支援人材募集）

等

交流のひろがり

- ・インターネットにより、地域と外部の地域ファンとの交流を図る。
- ・個人のホームページなどで、当該地域の環境資源を紹介しているもの（例えば、本モデルでは「奥八九郎温泉」）とのリンクを検討するなど、ネットワークの拡大を図る。
- ・地域の情報発信と併せて、地域の特産物の紹介・物販を検討する。漬物や味噌など、地域独自の食に関して、個人での消費が少なく、次第に製造されなくなったもの等に関して、インターネットでの受注生産によりその再生産を図るなど、地域の環境資源のアピール、ワイズユースを図る。

環境共生型地域づくり

～ 外部人材の取り込み方策 ～

- ・地域の外部ファンとの交流により、地域の伝統芸能、生業の担い手の確保を図る。
- ・温泉利用などの環境資源の直接利用や、伝統芸能の体験参加、集落の伝統的な遊び体験など、イベント的な交流から「集落ファン」を増やし、最終的には、その中から集落づくりに関わる、地域づくりサポーターの育成を図る。

3. 3つの視点からとらえたワイズユースのあり方

(1) 環境教育の視点からのワイズユース

1) 基本的な考え方

本物を使った実体験型

地域に存在する自然や伝統文化など、本物の環境資源を使った、実体験型の環境教育であることが重要である。

- ・年縞、自然環境、伝統芸能や農林業といった本物の資源を活用
- ・自然と伝統的な生活文化がまだ残る秋田だからこそ可能なこと

これにより資源そのものを大切にすることにつながる（資源の持続性を確保する）

知る・学ぶから行動へつながる展開型

学びが単に知識や情報を得ることに留まるのではなく、地域の自然や伝統文化を通じて得た知恵や技術を日常の生活や経済活動に活かしていけるような、まな、学んだ人が次の人の学びに貢献していくような展開シナリオを描くことが重要である。

- ・より高度な知的好奇心をみたく専門性にこたえうるもの（そういう段階を準備）
- ・地域ガイドや情報発信など対象者の拡大や相互の学びにつながる展開が可能なもの（そういうしくみを準備）

地域の人材育成、来訪者からの情報発信など来訪者も参加する展開

資金的に自立型

環境教育の展開が、資金的に自立していけるものであること。

- ・学びのツアーとの一体的展開

2) 実現の方法

ア 地域環境教育モデル

(ア) 年縞を活かす地域の環境教育の展開

男鹿地域の住民がまず年縞を知り、年縞との関連で男鹿のことをよりよく知り、年縞をはぐくんだ男鹿の自然を大切にする。そこから、男鹿の住民だれもが年縞の説明ができるような状態にする。このことにより、年縞を地域の財産として認識し、またこの年縞を育ててきた良好な自然を大切に、さらにそれを活かした地域づくりへと展開していく。

地元での徹底した説明会、勉強会	男鹿地元学へ（地質、自然、歴史等）
	地域振興へ（観光的な活用方法）
地元での学校教育	
地域ガイドの育成、登録	

男鹿における年縞教育の取組の第一歩として、本調査の中で小学生を対象とした学習プログラム導入実験（GAO 企画展シンポジウム）を行った。この講演では、男鹿のなまはげとイースター等のモアイをとりあげ、年縞が示す人と自然との関わりの歴史、文明のあり方が分かりやすく語られた。初めは難しい内容ではと思っていた児童も見受けられたが、分かりやすい内容で面白かったと好評であった。年縞そのものへの理解が深まったことに加え、自然破壊と年縞とを関連づけることができ、男鹿の自然に対する誇り、自然を守りたいという動機を引き出すことに成功したといえる。

男鹿水族館 GAO 企画展開催シンポジウム（平成19年2月2日（金））の概要

1. 目的

- ・シンポジウム後のアンケート調査により、参加者の意識及び教育普及効果を検証することを目的とする。

2. 実施内容

- ・男鹿市の一ノ目潟における年縞調査のパネル展示（企画展）
- ・安田喜憲検討委員長・（国際日本文化研究センター教授）による講演会
- ・参加者全員にアンケート調査

3. 参加者

- ・男鹿市内の小学生 62名（4年生12名、5年生28名、6年生22名）

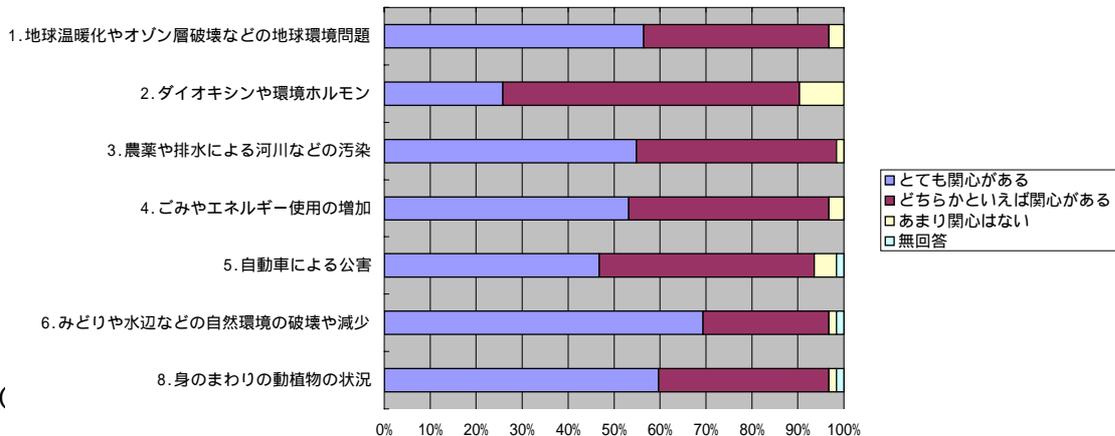
4. 安田教授の講演概要（なまはげとモアイ どっちが偉い？）

- ・なまはげとモアイはどちらが偉いか。どちらも守り神である。
- ・モアイのふるさとのイースター島では、西暦1,200年で年縞が消滅。モアイを作るために人々は森を伐採し、食糧難が起こってモアイ倒し戦争へと発展した。その結果イースター島の文明は滅亡し、それが年縞の消滅した時期と一致する。
- ・年縞は環境のよいところではしかできない。男鹿ではその年縞が現在まで続いている。
- ・男鹿ではなまはげが森の環境を守ってきたので年縞が残っているといえる。
- ・地球もイースター島と同じで、森が破壊されたら人間も生きていけない。
- ・これからも男鹿の環境となまはげを大切にしていかなければならない。

5. アンケート結果

（1）環境問題への関心度

全体として環境問題への関心度は高いが、特に身近な自然（みどり、河川、動植物など）への関心が高い。小学生にとってあまり身近でないもの（ダイオキシン、環境ホルモン、自動車公害など）への関心はやや低い。



< 勉強になったこと >

- ・年縞のことをよく知らなかったが、過去の気候や植生まで分かると知って勉強になった。
- ・一ノ目潟はただの湖だと思っていたが、こんな貴重なものがあると知って勉強になった。
- ・図や写真、年縞の実物が見られたので勉強になった。

（3）安田教授講演会の感想

（「なまはげとモアイ、どっちがえらい？」）

- ・自然を破壊したモアイよりも、自然を守るなまはげの方が偉いと分かった。
- ・環境が破壊されると年縞がなくなると分かった。
- ・男鹿の自然を守りたい。
- ・美しい年縞は、一ノ目潟とフィンランドにしかない。



安田教授講演風景（男鹿水族館 GAO にて）

(イ) 地元学、地域学の展開

今回の調査において、地域の環境資源をまず住民自身が気づき、掘り起こす、地元学あるいは地域学の重要性が確認された。

今回の調査の中では、熊谷教授の調査研究において、インタビュー方式で調査、記録がなされた(詳細は、個別調査編 第2 テーマ別調査の3を参照)。また、本調査の中のフィールド調査(アンケートの実施 集落調査(ワークショップ形式))も一つの手法として位置づけることができる。

これらの調査研究より、地元学、あるいは地域学の実施において特に次のような点が重要なポイントであるといえる。

集落単位などの狭い範囲の地域を対象とすること

- ・市町村レベルといった広がりのある範囲ではなく、狭い範囲で実施することにより、地域住民のより主体的参加がみられ、内発的な動機づけが高まると思われる。

失われた資源、失われつつある資源にも着目すること

- ・地域に今も存在し、自慢できる資源に着目するだけでなく、ワイズユースの技術や知恵を掘り起こすには、失われてしまった資源や失われつつある資源にも着目することが重要である。
- ・また、地域の環境資源としては、山や川、森林などの自然環境のほか、長い年月の人と自然とのかかわりの中で培われてきた歴史文化(祭り、伝統芸能、行事等)や生活文化(生業、食、道具づくりなど)に着目することが重要である。

外部の刺激、外部の人材を活用すること

- ・地域住民の気づきを促すには、外部からの刺激が重要である。住民をファシリテートし、また記録をしまとめる外部の人間の存在が有効である。そのような人材としては、研究者やコンサルタント、行政職員、地域のNPO等多様な可能性があるが、とりわで地元大学の研究者や学生との連携は重要な手法の一つといえる。地域住民にとって、若い学生は刺激となり活性化につながるとともに、学生の教育という面からも非常に意義は大きい。

イ 秋田県全体における環境教育モデル

県内の学校教育及び社会教育において、年縞の価値及び年縞と関連した地球の環境史や、地域の歴史、人と自然との関わりについて学ぶしくみを作りあげる。そのためには、以下のような取組が必要である。

年縞拠点の整備

- ・地元における年縞実物の展示

男鹿の学びのルート

- ・男鹿は、菅江真澄が描いた景観が今も見られる。男鹿は地質の標本の宝庫。これらを活かした学びのルートの整備。

環境教育教材の作成

男鹿のすばらしさを対外的にアピールできる人材の育成

年縞の展示

古文書と同じように、堆積物を解析することは過去の環境・気候変動を1年単位に読み解くことであるとの言及がある。そうすることによって、変動の周期性が明らかになり、気候変動の将来予測につながることを強調している。博物館内のショップでは年縞をイメージした記念グッズを購入できる。

レンズを覗くと、下方のパネルに何年前であるかが表示される。生徒は「年縞」から地球の時間の流れを自らの年齢から理解できる。



フィールドの案内板

案内板には、地形学的特徴、湖沼掘削方法、年縞堆積物の特徴と花粉化石分析からみた気候変動カーブが記され、現在の状態が大きな地球環境変遷史の中でどこに位置づけられるのかが手際よく述べられている。



環境整備

目潟と同様、過去3万年間の年縞が認められているホルツマー湖 (Holzmaar)。

湖岸に遊歩道が設置されているが周辺の道路および駐車場も含めて舗装されていない。

環境整備

ホルツマー湖では気温・降水量、水温・溶存酸素濃度の深度別変化が1時間ごとに観測され、基地局および各学校にテレメートされる。生徒は現代の環境の状態を容易に見ることができ、一つの「教材」となっている。



ドイツ アイフェルのホルツマー湖 (左：上空より、右：気象等の観測設備)

ウ) 年縞で地域資源を新たに価値付け - 環境史を機軸としたワイズツーリズム

年縞から分かる地域の環境史により、広域的な環境資源を関連づけ、環境史を機軸とした学びの旅として展開する。

広域ワイズツーリズムの展開例

年縞から知る地域の環境史と火山を学ぶツアー、環境史と人の営み（遺跡）を学ぶツアー
年縞と八郎太郎伝説から知る地域の環境史
秋田を発見した旅人達の足跡と当時の環境を知る（菅江真澄、イザベラ・バード等） 等

3) 今後の課題

ローカルからグローバルへの発信

今後、この男鹿の年縞の価値と、これを育んできた男鹿の環境と人のすばらしさを広く全地球的に発信していくことが重要である。

そのためには、発信の場、機会、人材を形成・育成することが必要である。

年縞と環境史を総合的に語る「語り部」の育成

男鹿地域の中で、男鹿の年縞を核に、地質、動植物、菅江真澄等の歴史など、総合的に男鹿の環境史を語るができる人材を育成することが必要である。

今回、社会実験においては、60歳代のリタイアした男性や50歳代の女性グループの参加があり、それぞれ様々なネットワークを持ち、資源発掘や情報発信の活動を行っている。このような既存のグループ・団体との連携、また今後大量退職の時期を迎える団塊世代の参画等をうながして、人材を確保していくことが重要である。



ローカルから世界へ発信する国際シンポジウム

(平成 19 年 3 月 24 日 ~ 26 日 大潟村にて開催)



菅江真澄について話をする地元の研究者

(この研究者が経営するホテルでは、菅江真澄の足跡をたどるガイド付きツアーを実施している。写真は、社会実験実施時の講義風景)

(2) 経済活性化の視点からのワイズユース

1) 基本的考え方

経済活性化の視点からの環境資源のワイズユースとは、以下のような点が重要である。

地域のうずもれた環境資源を、ワイズユースの観点からその価値を改めて認識し、経済的に活用するものであること。

その活用方法は、環境資源の持続性が保たれるものであること。

その活用方法は、地域住民の内発的な活動にもとづき、地域住民自身が主体となって展開するものであること。

その活用方法は、単に経済的なメリットを生み出すだけでなく、地域の住民を元気づけ、地域コミュニティの活性化や再生に結びつくものであること。

うずもれている地域の環境資源を経済的に活用する

ワイズユースの観点からは、地域で十分活用されていない、あるいはその価値が十分認識されていない、うずもれた資源をうまく活用し、そのような資源の中に長い年月の間受け継がれてきた価値観や、ワイズユースの技術・知恵に光をあてていくことが重要である。うずもれている資源には、以下のようなものがある。

- ・ 価値が十分認識されず未利用・低利用の資源
- ・ かつては価値があり活用されてきたが、その価値が低下し放置されている資源
- ・ 荒廃あるいは消滅しつつある資源

ワイズユースという視点からの活用方法

環境資源を経済的に活用する際に、ワイズユースという観点からは、以下のような条件を充たしていることが重要である。

- ・ 環境資源の持続性確保：自然の生態系の本来の機能を失わない範囲の利用、そのためのルール等を共有する
- ・ 地域の内発的な活用：地域住民の気づき、発意によるもの、外部からの刺激は必要
- ・ 地域住民にとっての多様なメリットを提供：経済的メリット、地域の誇り等精神的メリット、健康・QOL等のメリット等

さらに個人のメリットだけでなく、これにより地域社会にとってのメリットがあること（交流等による活性化等）

2) 経済活性化の視点からのワイズユース実現の方法

ア ワイズユースの方法

経済活性化の視点からのワイズユースの方法としては、以下のようなものが想定できる。

地域住民自身が主体となり内発的に資源の活用を行うとともに、ビジネス化の過程で地域住民だけでは困難な部分について、これを地元行政や大学等の関係機関がこれを支えることが望まれる。また、さらに広く地域外へ発信し、都市地域等地域外の人や財源を確保していくことも重要である。

ワイズユースの方法

地域の内発的な活用

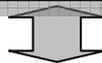
環境資源の観光利用 - ワイズツーリズムの展開

地域の資源の良さを外部の人に知ってもらう 地域ブランド化、知名度アップによる効果

観光利用に伴う波及的経済効果（内部調達を高めることが必要）

地域住民が関わることで、地域住民自身の資源への認識が高まる

観光資源として利用することで、地域資源を維持・再生する動機づけが高まる



地域資源を活用したビジネス化

地域産業振興（特産品販売等により農林漁業振興） 農地森林等資源の持続

コミュニティビジネス 地域資源を活用・管理するビジネス、

資源活用を通じた地域住民の元気、地域のコミュニケーション等



地元自治体や関係機関の連携・協力・支援

、 の取組を支えるしくみ

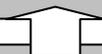
と は相互に関連し相乗効果を生み出す

住民は資源を大切にしようという活動には参加してもビジネスとなるとハードルが高い

ビジネス化を支えるしくみが必要

起業の支援（情報、研修、専門家の派遣等）

マーケティング（アンテナショップ、IT活用・ポータルサイト、消費者と直接契約、企業との契約生産等）



都市地域等地域外のまきこみ

その他補完的なしくみ - 外部資金調達

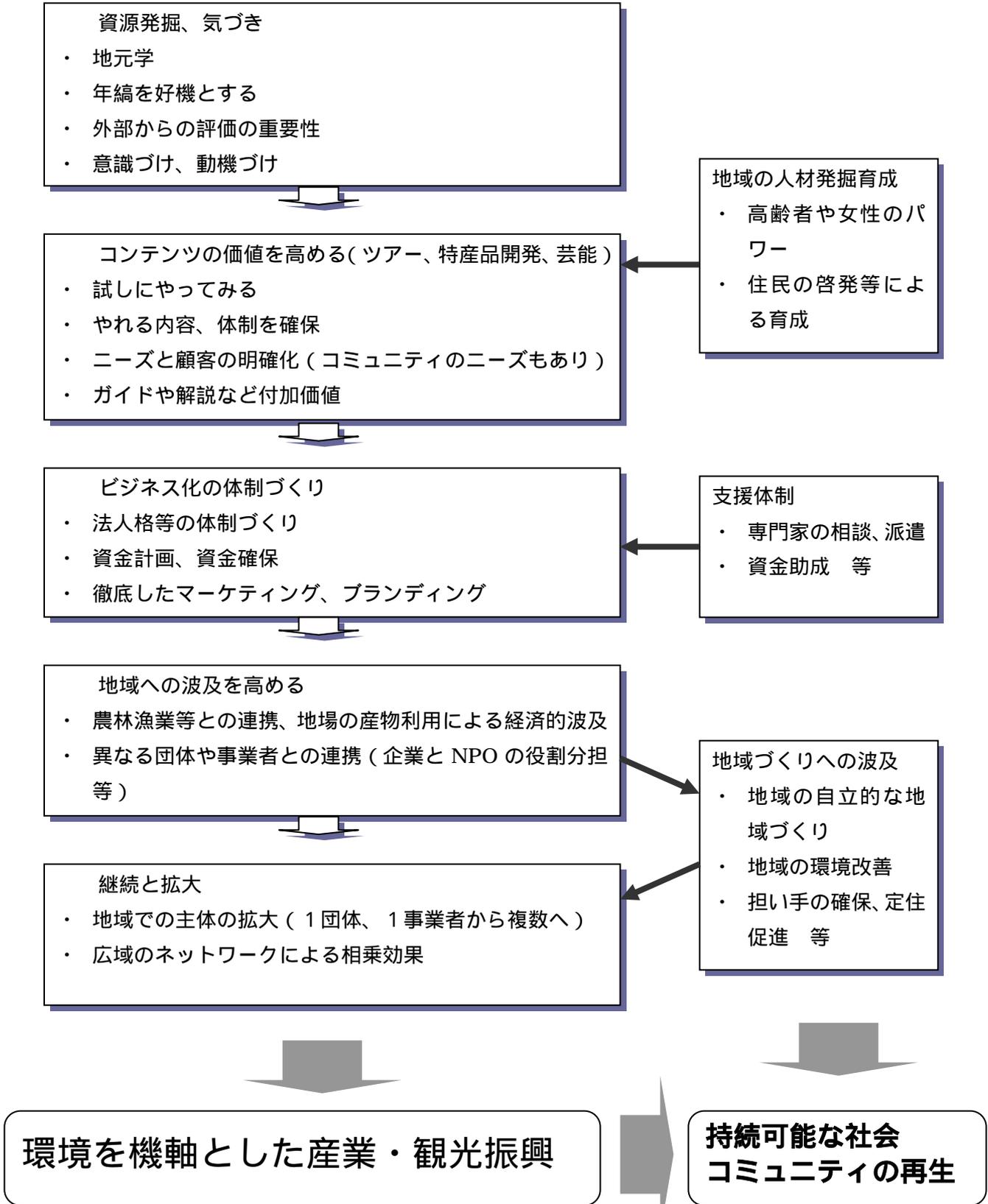
寄付、基金（資源保全等）

オーナー制度（資金+労力、観光）

企業の森等、企業のCSR活動のとりこみ

イ 経済活性化の視点からのワイズユースの基本ステップ

経済活性化の視点からのワイズユースの実現方法は、以下のようなステップにわけることができる。また、先に検討した個別モデルを、このステップにあてはめると、p157のように整理することができる。



3) 今後の課題

ビジネス化支援の必要性

地域住民だけでは、ビジネス化は困難な場合も多く、以下のような支援が望まれる。

a. 起業支援

起業を支援する組織の設立とサービスの提供

主体は、行政、NPO、事業者等多様なものがあり得るが、ある程度公的なものが望まれる

起業支援の内容例

起業の講座

- ・会社のおこしかた、事例研究、起業家の訪問等
- ・事業のコンセプト形成、商品開発、マーケティング等
- ・事業計画作成

専門家による相談、専門家の派遣

起業したものの交流会、ネットワーク

補助金

共同オフィスの提供（一定期間低料金で利用、設備・空間等の共同利用）

投資家とのマッチング（愛知NPO プラザ 道場的起業市場）

b. 徹底したマーケティング、ブランディングによる価値強化

マーケティングやブランディングには、外部からの専門家の支援が重要である。

年稿を例としたマーケティングの手順イメージ

1. 年稿の持つ価値の分類（学術的価値、科学調査としての価値、歴史的価値など）
年稿をいかに商品化するか？（目濁に案内する、サンプルを展示するなど）
2. 誰がこれらの価値に興味を持つか または、誰が新たに価値を見出すか？
消費者の分析とターゲットの選定
一般観光客（強いブランドイメージ必要）
知的好奇心の強い関心層（学びのツアー、専門性をもった内容）
子ども（学校） 等
3. 価格設定
どのような価格設定をするか
4. どこでどのように売るか
年稿の見つかった目濁を訪れたり展望できる場所に案内する。
サンプルを説明文とともに展示したり、ガイドに説明させる。
5. マーケティングコミュニケーション
上記ターゲットごとに媒体やプロモーションの内容を選定し、情報発信する。
発表論文などについてメディアに報道してもらう。

外部資金調達のごくみの重要性

過疎化、高齢化が進む中で、この地域の環境資源をこの地域の住民だけで管理し、経営していくことは困難であると考えられる。この地域の環境資源を、広く我が国全体、あるいは地球規模で価値あるものとして活用し継承していくには、外部からの資金や労力を調達することも重要な視点となる。

外部資金等の調達方法例

1. オーナー制、ファン倶楽部

資金調達とともに、交流機会をもつ。

オーナー制：一定の金額で農地や樹木等のオーナーとなってもらい、収穫物の発送、イベントの開催等

ファン倶楽部：会費を徴収し、情報提供、イベント開催等

2. 基金・ファンド

ナショナル・トラストのように保全目的（買い取り資金確保）のものや、公園等の植樹など整備目的のものがある。対象が具体的ではっきりしているほうが、資金は集まりやすい。

3. 企業CSRの誘致

企業の森等、企業のCSR。企業従業員の福利厚生利用も期待される。

経済活性化の視点からのワズユースモデル（ステップに対応した個別モデル整理）

注）斜体はこれからの提案

ステップ	男鹿年縞モデル	白神森と海の連携モデル	小坂産業観光モデル	食と農の交流ビジネスモデル	常盤体験型ツーリズムモデル	阿仁マタギの知恵モデル
<p>資源発掘、気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元学 ・年縞を好機とする ・外部からの評価の重要性 ・意識付け、動機付け 	<p>年縞調査による資源の価値付加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年縞調査が注目をあびている 年縞調査であらたな価値づけ <ul style="list-style-type: none"> ・菅江真澄研究会、スローフード等男鹿の資源を見直す動き <p>年縞調査の今、男鹿の資源を見直す</p>	<p>白神山地世界遺産登録による外からの関心の高まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白神の価値がみえにくい ・アクセスが悪い <p>訪れたい人からの問い合わせ</p> <p>白神山地に人をつれていきたい</p>	<p>鉱山の衰退・閉山</p> <ul style="list-style-type: none"> ・残されたのは精錬技術と、康楽館等の遺産 <p>興行停止してたものが文化財に</p> <p>鉱山のまちの歴史をいかしてまちの復興を</p>	<p>地域の食と農をなんとかしたい</p> <p>県のいきいきむらづくり事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JAの婦人部のメンバー中心 <p>「伝統食づくり」や「農業体験」ができる直販所をつくりたい</p>	<p>10年後の「ふるさと」の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過疎化、高齢化から10年度の姿を想像 ふるさとの将来像（何を残したいのか） 「やればできる」ことの確認 ・資源観察、資源マップづくり等ワークショップ等の多用、お母さんと子どもの体験教室 	<p>集落住民への聞き取り調査～集落学へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究者・学生の徹底した聞き取り調査 <p>もっと語りたいたいという気持ちの芽生え</p>
<p>コンテンツの価値を高める（ツアー、特産品開発、芸能）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試しにやってみる ・やれる内容、体制を確保 ・ニーズと顧客の明確化（コミュニティのニーズもあり） ・付加価値づけ 	<p>年縞の価値のアピール</p> <p>国際シンポジウム（予定）</p> <p>全国年縞サミット（仮称）のリリース開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・継続的な価値の発信 	<p>白神への交通手段の提供</p> <p>バス事業者としての特徴をいかした取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空港からのアクセス提供 ・利用する人はいないといわれた ・予想外に多い利用者 十和田からのツアー <p>事業として成立する</p>	<p>鉱山の歴史をいかしたまちづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際資源大学誘致 百年通りづくり構想 秋田県北部エコタウン構想 <p>観光客増加とリサイクル産業集積</p>	<p>ビジネス化の準備</p> <p>常設直販所を設置する会を結成（女性農業者108名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年会費をとって主体的に学習、自分たちが望む姿を検討 ・地域住民と語る会、市長と語る会 一部地元住民の反対陳情 ・誰もやめようといわなかった 	<p>付加価値作物の栽培</p> <p>栽培のスタート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米：昔ながらの田植えWS、借りた田での学生による栽培 ・花：ベツレヘムの星の球根をトライアルとして農家へ提供 <p>販売イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米：東京での直販イベント ・花：結婚式場の協力で花を飾りプレゼント 	<p>集落学の構築 - ワズユースのデータベース化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資源の発掘と記録 ・残る「もの」の収集・展示 ・伝承・民話の発掘と記録 ・集落外部の研究機関との協働による
<p>ビジネス化の体制づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法人格等の体制づくり ・資金計画、資金確保 ・徹底したマーケティング、ブランディング 	<p>年縞博物館と学びのルート</p> <p>年縞博物館（仮称）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実物の年縞を展示 ・学びの拠点 男鹿 年縞 学びのルート設定 ・自然、地質ルート ・菅江真澄と歴史ルート等ガイド付き学びのツアー ・大人の学びのツアー、 ・修学旅行、学校の学習利用 ・通常ではいけないルートを 	<p>ビジネスとしての徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予約の状況に応じてサービス提供することで経費を抑える ・参加者の統計をとる <p>以外と多い60代男性一人旅</p>	<p>産業観光の可能性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おとなの修学旅行、大人の社会科見学 鉱業分野 畜産分野 県モデル事業 ・大館市と連携した市民相互の見学会も 	<p>ビジネス立ち上げ</p> <p>会員の出資と施設リースでスタート（補助金に頼らない）</p> <p>組織を形に（全員参加の4部制）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主自立の企画運営体制 意欲あるリーダーの存在 消費者ニーズの追求（消費者アンケート等） 高付加価値の追求（会員の特技をいかした加工品開発、商品化） 儲けにこだわる（会員収入） 	<p>担い手集団形成・体制づくり</p> <p>集落住民主導の核組織設立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさと協議会、ときめき隊（実行部隊） <p>地元農家の栽培体制づくり</p> <p>販路開拓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米：東京での直接販売、県内コンビニへの販売、東京のおにぎり業者への販売 ・花：フランスへの輸出（見本市への出展） 	<p>機関産業強化</p> <p>高付加価値木材産品と地元特産品開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森林組合、職業訓練校、建設業者、家具作り職人、県内大学等との連携 マーケティング、ブランディング ・パッケージング強化 「阿仁食の祭典」出展作品の全国展開
<p>地域への波及を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農林漁業等との連携、 地場の産物利用による経済的波及 ・異なる団体や事業者との連携（企業とNPOの役割分担等） 	<p>地域の人の学習</p> <p>地域への説明会</p> <p>地元学校での学習</p> <p>年縞の語り部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元の人が誰でも説明できる 	<p>地域への波及、地域との連携</p> <p>他の事業者へも波及</p> <p>多様な主体との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイドNPO等との連携 ・周辺宿泊施設との連携 ・廃校等地域の資源活用 等 	<p>地域づくりへの展開</p> <p>地域全体の資源循環</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小坂町エコタウン構想（堆肥化等） ・パイオスタウン構想（菜の花プロジェクト） みんなの地域づくり事業 ・集落計画、自治会の自主的事業 	<p>地域との連携を重視した事業</p> <p>地域食文化の発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家レストラン経営 地域との連携 ・学校公民館等へのお出前講座 ・学校給食への食材供給 	<p>精神的活性化</p> <p>資源マップづくりからグリーンツーリズムへ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京のNPOを招待、交流イベント、グリーンツーリズムオフィス設置 ・花壇づくり：都市住民と農村住民によるプランター制作WS（間伐材活用、生ごみ堆肥化） 	<p>ワズユース継承のための体制整備</p> <p>情報発信機能強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集落ブログ立ち上げ、定期的な集落ビデオ作成・発表会、集落学の発信等 後継者確保 ・県内大学生の弟子入り制度、地域内小学校での集落学成果展開 研究拠点形成 ・狩猟文化研究、海外との比較研究等
<p>継続と拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域での主体の拡大（1団体、1事業者から複数へ） ・広域のネットワークによる相乗効果 	<p>地場の農林漁業との一体化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食のツアーへのくみこみ ・特産品の開発・販促 ・学びのツアーにきた人を継続的な顧客に <p>農林漁業振興、後継者育成</p>	<p>白神エリア一帯としての展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・八森側と藤里側の連携 ・青森側との連携 ・白神特産品販売との連携 ・年縞との連携、林政史を学ぶツアー ・大学研究期間との連携 	<p>地域づくりと一体となった観光等の展開</p> <p>産業観光で訪れる人を地元のファンに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野口集落ファンクラブ ・グリーンツーリズム ・伝統芸能の担い手等 	<p>様々な主体との連携で新たなビジネス展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行の受け入れ ・宅配 - 消費者とのネットワーク ・地元小中高での継続的食育 ・グリーンツーリズム（近隣温泉との連携、粕田集落との連携） ・直販所ネットワーク 	<p>自己評価と継続</p> <p>シンポジウムの開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民100名参加、テレビ放映 ・活動報告 ワークショップ 継続性のある組織づくり ・地元組織のNPO法人化 	<p>エコツーリズム推進と人材育成</p> <p>エコツーリズム推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・番学、神楽、獅子踊りサミット ・「集落学」成果のプログラム化 ・県内外小中学校の修学旅行推進 コーディネータ・プロデューサーの育成

注）この表では、経済活性化の側面を強く有するモデルだけを対象として整理した。

(3)「環境共生型地域づくり」の視点からのワイズユース

1) 基本的考え方

「環境共生型地域」とは、すなわち「持続可能な地域」と捉えた

本調査では、「環境共生型地域」とはすなわち、「持続可能な地域」として捉えている。

地域が「持続可能」とは、地域の自然環境とのつきあい方(保全・活用・創造)の技術、生業に係る技術、地域の伝統文化など、地域の環境資源を活用する知恵が連綿と世代を超えて活かし、その知恵により環境負荷を最小にし、資源循環を図り、自然生態系を維持することと捉えている。

2)「環境共生型地域づくり」の意義

薄れつつある、地域の自然環境と地域社会や日常生活との関係、人々の関係を見直す。

地域に受け継がれてきた、または途絶えている、自然環境との関係、多様な主体の協働の方法を、現代の社会のあり様を踏まえながら再構築する。

地域独自の多様な環境資源や人材を連携・活用する。

以上により、「環境共生型地域づくり」を推進し

地域の活性化を図る

近年、わが国では、高齢化、少子化が進展するとともに、人口の減少期を迎えている。本調査対象地も例外ではなく、少子化に加え、若手や働き手の流出といった後継者不足など、地域運営において難しい局面を迎えている。

また、本調査対象地域は、第1次産業が地域の基幹産業であり、かつては地域の自然環境と地域社会、日常生活が密接に関わっていたが、社会経済の変化、生活様式の変化などにより、地域の自然環境との関係も薄れつつある。

このような、地域を取り囲む自然環境との関係の希薄化、人のつながりの希薄化、集落の特徴の希薄化(画一的なライフスタイル)の傾向は、今後一層強まるものと考えられる。

その一方で、本調査対象地域は、周辺を取り巻く自然地の豊かな生態系、農村景観、歴史的資源など、地域固有の資源に満ちている。

先の地域をとりまく情勢に対処するためには、それぞれの地域が創意・工夫し、地域ならではの特徴を発揮しつつ、多様な環境資源や人材を連携・活用し、「環境共生型地域」を目指し、地域自らの活性化を図ることが今後ますます求められる。

その際、地域に受け継がれてきた、または途絶えている、自然環境との関係(つきあい方)、多様な主体の協働の方法を、現代の社会のあり様を踏まえながら再構築し、各地域の特性に則した無理のない方策で、持続可能な地域づくりを推進し、地域の活性化を図ることが重要である。

3) 今後の課題

集落単位の環境共生型モデル（地域学）の蓄積

- ・ 今後県内各地の「集落」で地域に継承される各種伝統・生活資源に関する聞き取り・文献調査を集落住民と協働で行いつつ「環境共生型地域づくり」に関する情報を蓄積・分析する。

環境共生型モデルの普及

- ・ 行政関係者はもとより、地域住民、学校教育関係者などにも、広く上記成果を公開。
- ・ 年度単位で「環境共生型地域づくり」のシンポジウム等を開催し、最新情報の普及、啓発を行うとともに、取組主体間の交流の機会を創出する。

先導的なプロジェクトの展開

- ・ 上記データベースを活用する地域の自発的な取組を、「先導的なプロジェクト」として支援し、成功事例の積み上げを図る。
- ・ 先導的なプロジェクトとして、「常盤モデル」のような複数年の継続プロジェクトも検討する。
- ・ また、目に見える実践成果として、実践の過程でしか得られない様々な課題、その解決方法について上記のデータベースへの蓄積、公表、普及・啓発を図る。

地域が主体的に「環境共生型地域づくり」に取り組む際の支援方策の検討

- ・ 「地域学」を推進するための仕組みづくり
- ・ 都市農村交流等、実践者（農業者等）の技術向上のための支援プログラム制度の設立（実践者の技能向上を第1とする事業の設置）
- ・ 県内大学生によるインターンシップやワーキングホリデー制度を活用した「環境共生型地域づくり」への参画を推進
- ・ 「環境共生型地域づくり」を継続的に推進するコーディネーター・プロデューサーの育成

4 . 環境資源のウィズユースによる持続可能な地域づくりに向けて

(全体モデル)

(1) ウィズユースで目指すもの

ウィズユースによって、我々は持続可能な地域づくりを目指している。持続可能な地域とは、以下の3つの側面の持続性がバランスよく実現されている状態と考え、環境資源のウィズユースとは、環境資源の利用を通じてそのような持続可能な地域づくりに資するものであると考える。

地域環境資源の持続性の確保 (環境資源のフィジカルな側面)

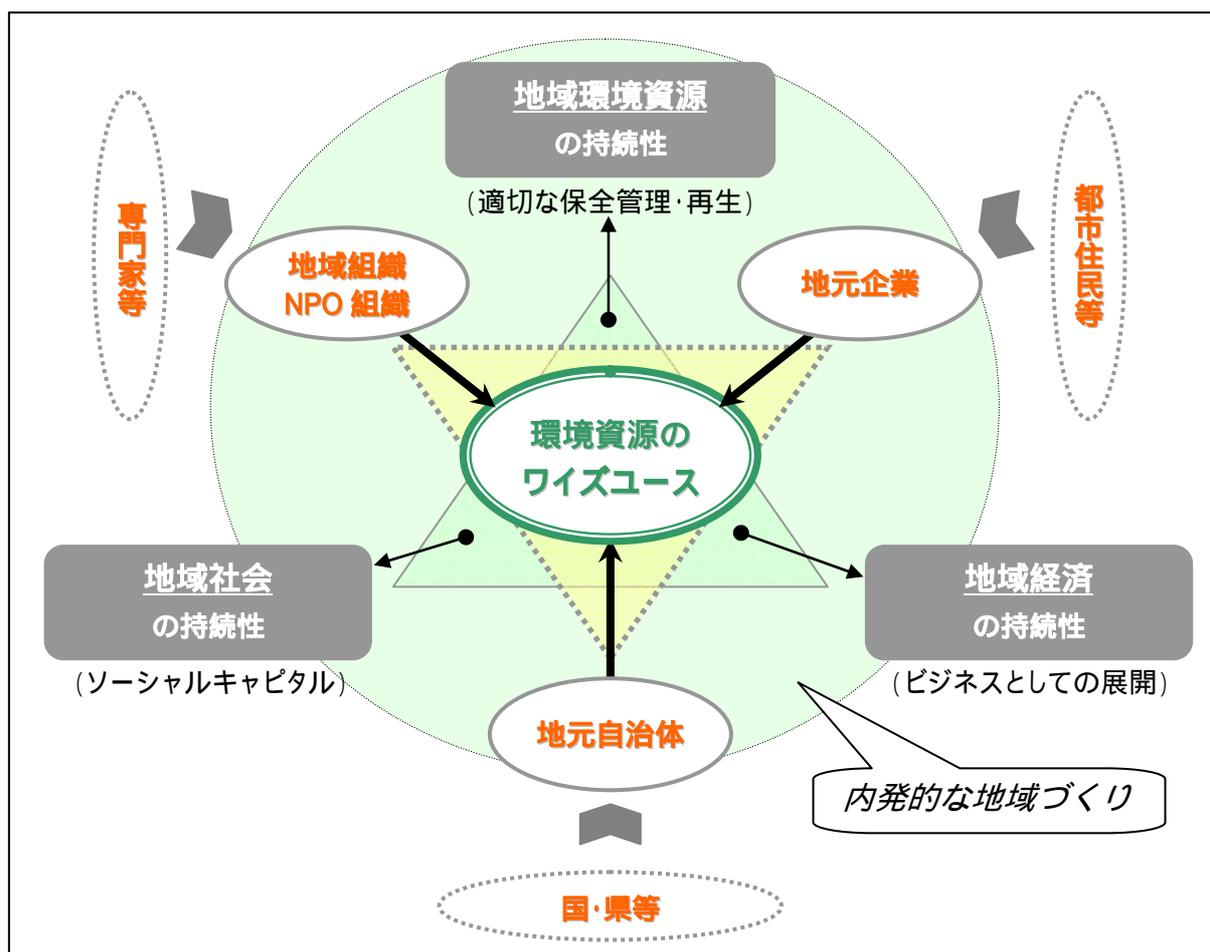
環境資源の利用を通じて、地域の自然、農地、森林、歴史的資源等の適切な保全・管理と再生につながるものであること

地域社会の持続性の確保 (地域の社会的側面)

環境資源の利用を通じて、地域住民の環境資源への認識、誇りの向上、地域住民間の年代間や属性を越えたコミュニケーションやネットワークの再構築につながるものであること

地域経済の持続性の確保 (地域の経済的側面)

環境資源の利用を通じて、地域住民や地域企業が主体となった新たなビジネスの展開により、地域資源の付加価値向上、地域の経済的自立性や持続性の向上につながるものであること



(2) ワイズユースを実現するためのポイント

地域資源の持続性確保

ア．資源の循環利用

地域内で資源が循環利用されること。バイオマスのエネルギー利用や、有機系廃棄物の堆肥化、農作物栽培への利用といった循環は、かつてはあたりまえに地域でいとなまれてきた。

この地域は、秋田県北部エコタウンの取組もあり、地域内循環を形成していくことに地域の特長とすることができると考えられる。

イ．環境容量の範囲内の利用

生態系の再生産の範囲内での利用や、生態系に過度な負荷を与えない利用であること。いわゆるオーバーユースとならないようにすることである。

白神山地のコア部分への立ち入りの制限はもとより、自然の中に立ち入る際に小グループで一定の人数の利用に抑えたり、貴重な自然域に対置入らないとなど過度な負荷を与えない利用とするといったことが典型といえる。

また、地域の人々は、山菜やきのこの採取にあたって、かならず次の年の再生産を考えたとりかたをしてきた。こういったことはまさにワイズユースの知恵であり、ルールである。

ウ．資源再生

手が入らなくなって荒れてしまっている自然や人為により変化した自然、失われてしまった文化を再生すること。人が自然を利用することは、なんらかの改変を伴うことはやむないが、失われた機能を回復したり、地域の大切な部分について再生をはかるといったことはワイズユースのシンボルとなる。

地域経済の持続性確保

ア．環境資源の観光資源活用 - ワイズツーリズム

地域の環境資源をワイズユースのコンセプトにのっとったツーリズムに活用すること。環境資源を観光資源として利用するということは、その資源の価値を知る人をひろげ、かつその資源を大切にすることにつながる。

この場合のツーリズムの考え方としては、地域の環境資源を損なわずその保全や再生を図りながら活用するものであること(例えば少人数のグループによるガイド付きのツアーや、農作業等を手伝うワーキングホリデーなど)、施設面においても過剰な整備は行わず、地域の遊休資源等を活用するものであること、地域の住民が資源の解説や事業の企画運営等に主体的にかかわり経済的なメリットが地域住民に還元されるものであること、来訪者との交流や事業を通じた地域住民同士の人的交流、コミュニティの活性化につながるものであることがあげられる。

イ．地場産業等の振興

地域の活性化には、自然を活用し、地域の特性にあった地場産業を、今に活かしていくこと。地場の産業は、地域の気候風土によって育まれる資源を使って成り立ってきた。これに着目し、新たな付加価値を付与していくことが、地域の活性化とともに、地域の森林や農地

等を有効に活用し、これら環境資源の適正な保全活用につながる。

ウ．コミュニティビジネス化

コミュニティのニーズにこたえることにより、必要な収益をあげること。環境資源の適正な保全活用や将来への継承のみならず、高齢者福祉等様々な地域ニーズと環境資源活用をつなげていくことが、地域の環境的持続性のみならず、経済的、社会的持続性の確保につながる。

エ．外部資金調達

地域コミュニティだけでは担いきれない部分に、外部の資金をうまく導入していること。あわせてツーリズムと連動させることが効果的である。

地域社会の持続性確保

ア．地域住民の気づき・価値共有

まず、現状では放置されたり価値が低下している環境資源に対する気づきがあること。地域住民が気づき、地域住民が主体となって資源活用、経済活性化を目指していくことが重要である。

イ．地域住民間交流

地域の知恵、地域の資源を世代を越えて伝えていくこと。そのために、地域内の世代間交流や多様な住民の交流が重要である。

ウ．担い手確保

地域の知恵、地域の資源を世代を伝え、また地域を管理していく担い手を確保すること。。そのために、外部の人の力を借りることも重要な一つの方法である。

個別モデルとワイズユース実現のためのポイント

個別モデル ワイズユース 実現のポイント		男鹿年縞モデル	白神森と海の連携モデル	小坂産業観光モデル	粕田伝統芸能復活モデル	食と農の交流ビジネスモデル	常盤体験型ツーリズムモデル	八郎太郎伝説モデル	阿仁マタギの知恵モデル	八九郎温泉サポーターモデル
		地域資源の 持続性確保	資源の循環利用							
環境容量の範囲内の利用										
資源再生										
環境資源の観光資源活用 - ワイズツーリズム										
地域経済の 持続性確保	地場産業等の振興									
	コミュニティビジネス化									
	外部資金調達									
地域社会の 持続性確保	地域住民の気づき・価値共有									
	地域住民間交流									
	担い手確保									

(3) ワイズユースの進め方

ここで目指している環境資源のワイズユースを進めるには、個別モデルの検討を通じて、以下のような視点とステップが重要であるということが導かれた。

地域資源の再評価・新たな価値の付与と学び・環境教育の視点

まず、現状では放置されたり価値が低下している環境資源に対する気づきが重要である。

地域の人が地域の資源の価値に気づくことが、地域の環境資源のワイズユースの第一歩であるといえる。ここでいう環境資源とは、自然環境そのものや農地、森林はもとより、自然を使った農林漁業による産物、さらにそれら自然や自然の恵みを使った食べものや道具、それらを作り出す技術といった生活文化、さらには自然との関わりや自然への思いを伝える伝統芸能や行事といった歴史文化、また自然の中での生活によって生み出されてきた歴史的な建物や遺構等を広く含むものとしてとらえている。

これらの多くは、アンケートでも見られたとおり、失われつつあったり、今はまだ残っていても次の世代には引き継がれない可能性を地域住民の多くが感じている。また、地域の人には当たり前のもんと思っていたり、あるいは地域にとっては大切だが外部の人が興味を持つとは思っていないということも多い。また、今記録しておかないと永遠に失われてしまう可能性も高い。

このような資源の価値への気づきが、ワイズユースの第一歩といえる。そのためには、外部からの刺激も重要であり、地域を知る「地域学」といったものを外部の人のサポートを受けながら実行するといったことが有効な手段といえる。

あるいは、今回の年縞から分かる環境史や、八郎太郎の伝説のように、新たな切り口で地域の資源を見てみると、そこに今までは気づかれなかった意義や価値が再認識できることがある。

経済活性化の視点

あらたに価値を再認識した資源を、経済活動に結びつけていく。それには、気づきに次いで、具体的に何を商品としてうるか、その中身を明確かつ確実なものにする段階がある。例えば、作られなくなっていた特産品を実際につくってみる、失われた伝統芸能を再現してみる、各家庭からのレシピを持ち寄ってみる、そういう中から商品化可能なものをみつけだしていく。ここで、地域の自然や伝統、地域に伝わる技術をいかに活かし、付加価値を高めていくかが重要である。

次には、ビジネスの立ち上げの段階となるが、これには地域住民だけではどうしてよいかわからないということも多い。自ら他地域を視察するなどして学ぶとともに、外部の専門家による助言受けられる体制づくりも重要である。特に、どういう価値を誰に対して売っていくのか、またいかに魅力的にアピールしていくかというマーケティングの視点は重要である。

そして、事業を自立、継続、拡大していくわけであるが、その過程で、地域の農林漁業や地場産業の振興、あるいは地域の元気につながるような地域への波及効果がワイズユースの鍵となる。

環境共生型地域づくりの視点

一方で、地域住民の気づきを、具体的な環境資源の利用の復活や、あるいはよりよい利用に変えていくことに展開していく。すなわち、今まで忘れられていた自然や資源を再度価値を与えて使っていく、そういうことをまず試し、それが継続していけるような方法やしくみをつくりだしていくことが必要となる。

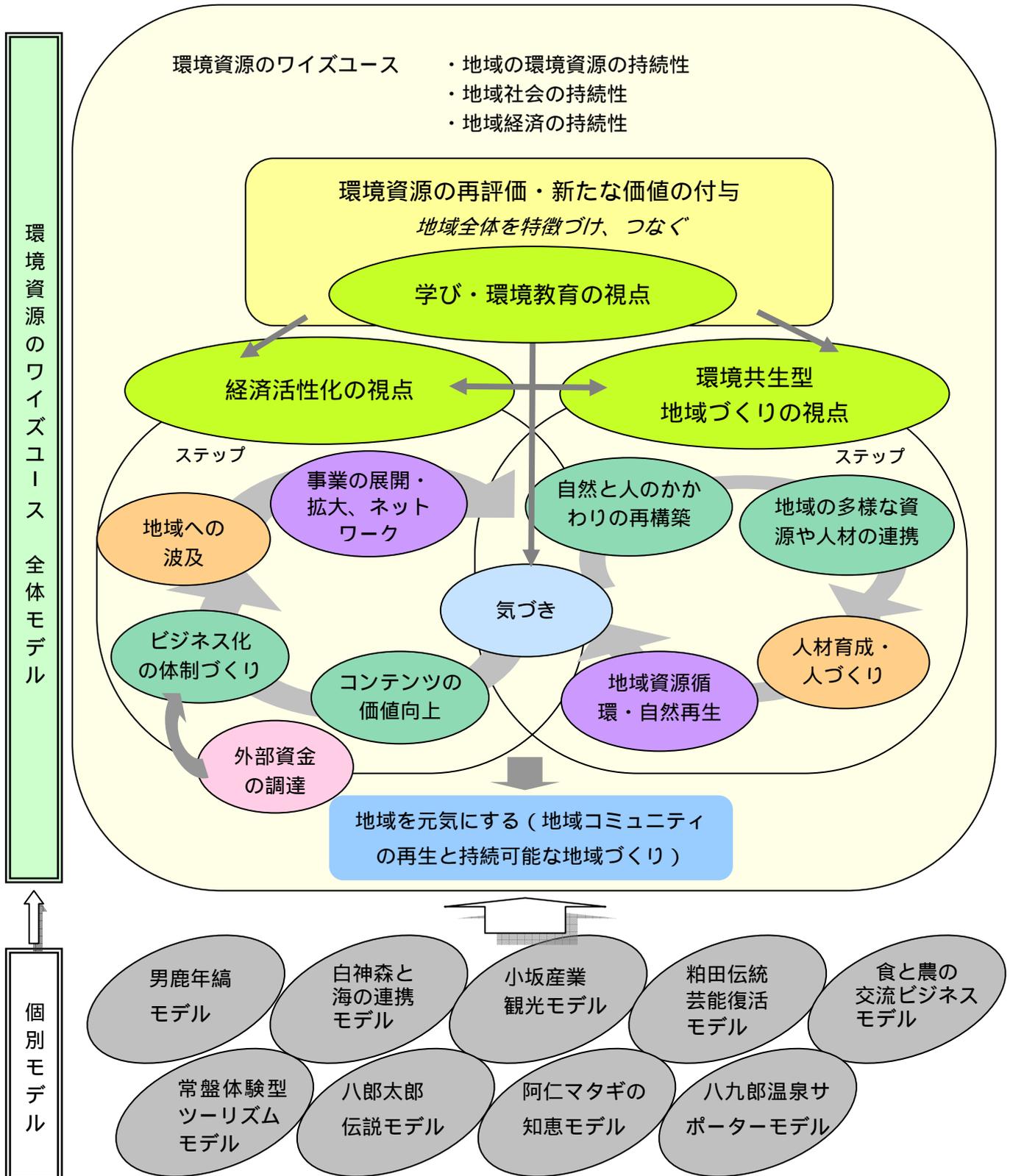
また、これを将来にわたって継続していくためには、これらをよく知る高齢者から地域の若者や子どもへ教えるなど、世代間の交流を通じて、再認識された資源等について、広く住民に共有されることが重要である。

さらに、これら環境資源のワイズユースの技術や知恵をひきつぐ、後継者、担い手を育成・確保していくことが重要となる。そのためには、地域の住民だけでなく、地域から外に出ていった人、地域のファンなど、地域外の人々の力も借りながら、担い手を確保していくことも必要である。外部からの人を取りこむことは、地域の刺激となり、地域を活気づけることともなる。

(4) ワイズユースの全体モデル

ワイズユースの全体モデルは、具体的な地域を例とした個別モデルを検討した結果を踏まえ、それらに共通する事項等を勘案し、全般的なワイズユースの考え方とステップを示すモデルとして作成したものである。

個々の地域においては、これらすべてがこのステップで出現するわけではないが、基本的にはこれらの総合的な展開が重要と考えるものである。



お わ り に

<環境共生型地域づくりと経済活性化は車の両輪>

地域の環境資源のワイズユースは、どのようにして実現することができるか。全体モデルの図に示したとおり、地域における気づきをスタートに、環境共生型地域づくりの視点と、産業活性化の側面が、車の両輪として機能していかなければうまくいかないものといえる。

<ワイズユースこそ秋田の活性化の鍵>

いかに環境が大切にされ、あるいは伝統文化が守られていても、そのために地域住民や地域の自治体が多大な経済的負担を強いられるようでは長続きせず、持続的とはいえない。経済的に成り立たない状況は、地域から人の流出を生み出す。そして、人がいなくなったところに文化は継承されない。自然は人手の入らない状態に戻り、ある意味自然は守られたといえるかもしれないが、それは環境資源のワイズユースとはいえない。経済的に成り立つ地域をつくりだすこと、これは地域の持続性を確保する上で非常に重要なことである。

一方、経済的な面だけを追い求めるような、いわば20世紀型の企業誘致や開発は、本地域の環境と社会の特性を活かすものとはいえない。現在の人口減少等を見れば、そういった前世紀型の産業開発において、本地域は他地域に比べて条件的に決して恵まれてはいないといえるであろう。しかし、それならば本地域には付加価値の高い経済活動は成立しないのかということ、そういうことではない。例えば、希少金属の抽出を行っているリサイクル産業は、この地域に古くから存在した銅精錬の技術の蓄積を基礎としている。また、かつては地元の人でさえその価値を十分認識していなかった白神山地は、現在は世界自然遺産として登録され、白神山地を訪れてみたいと思う人の数は決して少なくはない。その白神山地周辺の森林は、藩政時代には切りつくされ危機的な状況にあったこともあるが、秋田藩の行ったルールづくりや知恵によって再生され、今に至っている。

今回の調査で一ノ目瀧から掘り出された年縞は、世界的に見て屈指のものであり、3万年に及ぶ環境史がそこに記憶されている。年縞は環境が良好な状態で保持されているところにしか形成されず、このような美しい状態でみられるということは、男鹿の自然がいかに良好であるか、そして男鹿の人々がいかに自然を大切にし、自然と共に生きてきたかを如実に示すものである。

このような、地域にある自然、地域で培われた技術や知恵、これを活かして環境資源を活用していくことこそが、地球規模の環境問題が深刻化する今世紀において重要なことである。この点において、本地域は、まさに世界に発信できるワイズユースの宝庫であるといえることができる。

<我々が考えるワイズユースモデル>

では、このワイズユースを実現していくのは誰か、これはまさに地域の人でなければならない。地域住民が自らの地域のすばらしさに気づき、これを自ら活かそうという意欲をもち、行動していくことが重要である。しかし、本地域の過疎化・高齢化は著しいものがある。地域の高齢者がもつすばらしい技術や知恵の価値に地域ではなかなか気づかなかつたり、それを引き継ぐものがいなかつたりする現状において、地域住民だけで地域づくりを行っていくことは不可能に近い。外の人、専門家であったり、学生であったり、あるいは地域を訪れる観光客であったり、このような外部の人が、地域のもつ環境資源のすばらしさ、それを支えてきた技術や知恵の価値を高く評価すること、すなわち外部からの刺激により、地域住民の気づきが生まれることが多い。外部の力を借りつつも地域住民が気づき、内発的に地域づくりに取り組んでいくことが重要である。そして、ある取組が次なる気づきや取組につながり、地域の人づくり、環境づくりの側面と、産業活性化の側面が常に関連しながら、スパイラルアップを繰り返し、継続していく。このことで地域コミュニティが再生し、持続可能な地域社会が形成される。これが我々が考えるワイズユースのモデルである。



Y. Takahashi
2009

ワイズユースのシンボルマーク

この絵は、今回の調査にご協力いただいた鉛筆画家の高橋郁衣氏が、本調査のシンボルマークとして描いたものである。

秋田の豊かな自然環境と伝統文化を守り続けてきたナマハゲ、八郎太郎伝説にも登場する水神の象徴とされる龍、注目の年縞調査が行われた男鹿市目潟及びその周辺の自然をモチーフとして表現したものである。

